
キキとあほうとにゃ

びふう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キキとあほづとこや

【NNコード】

N9375X

【作者名】

びふつ

【あらすじ】

え、俺がやるのか？　ええと、どうも、喜衛喜々（きえいきき）ことキキです。この物語は一人の少年が異世界へと飛ばされ、大活躍して大活躍して大活躍するお話です。なんだ、これは。書き直せ、あほうが。

キキ + あわい = キキの危機（前書き）

この物語はフィクションです。

キキ + あほづ = キキの危機

残念な男前とはビビの学校にも一人はいるものだ。それは俺の通う学校も例外ではなく、世代を越えて女性うけするやつが一人いる。ただし、黙つて立つていれば、という注釈つきだ。

そいつはとにかく問題を起こす。口を開けば意味不明なことをほざき、何かアクション起こせば大なり小なり周囲の者に迷惑という名の被害をおよぼす。まったくもってはた迷惑なやつである。

俺はもっともそいつの被害をこうむっている人物だ。残念なことに、そいつとは幼稚園からの付き合いであり親友と呼べてしまう仲である。もしもタイムマシンが開発されたなら、俺は栄える一番めの使用者となることだろう。

そいつ、金子鳶春ことトビが時代を先取りし過ぎた感性で何か行動を起こすたびに後悔をする俺ではあるが、今以上に後悔をしたことがない。

なぜなら

「どうやら冒険の始まりらしい。オレが、この世界を、救うつ！」

隣のあほうが世界の壁を越えたからなんだ。

夏休みも残り一周間となつたある日、俺はトビが強引に貸し付けてきたゲームをプレイしていた。ジャンルは恋愛シミュレーションとこつやつで、異世界を舞台に女の子との恋愛を楽しむといったものだ。

暇だったのとおりあえずプレイしていたわけだが、どうにも、俺の趣味には合わないのでそろそろ止めようと思いつつゲーム機の電源を切ろうとしたとき、あいつがやってきた。

なんの前触れもなく開け放った窓から、アクロバティックに。ちなみに俺の家は庭付き一階建ての一軒家であり、自分の部屋は一階になる。

「よつキキー！」

部屋に入つてくるなり、トビは慣れ親しんだあだ名で俺を呼ぶ。

「わざわざ庭の木をつたつて入つてくるな、あほうが」

言いつつゲーム機の電源を切つてベットに腰掛けた。

「わかつてないな、お前は。突然の訪問つてのは意表をついてなんぼだらうが」

「お前は絶対セールスマンにはなるな」

「セールスマンになんかならないつての。セールスマンになるんだつたらNASAの職員になるつての」

なれると思つてゐるのか、じつは。

「そんなことよりだ、面白い話を仕入れてきたんだよ

「またかよ……」

トビは心靈現象や埋蔵金といった眉唾物まゆづものな話が好きで、尊話やネットなどで情報を拾つてきては真相を確かめに行きたがる。もちろん、俺をまきこんだのだ。

「今度のはかなり信憑性があるんだ。訊いてくれ」

訊きたくはないが、こいつの場合は訊くまで催促をしてくるため、全身全霊を込めて嫌そうに訊いてやることにする。さすやかな抵抗である。

「どんな話だ？」

「言つつかボケ」

よし、殺そう。

「そんな怖い顔すんなって、ジュピタージョークってやつだ

木星ジョークらしい。こいつ死ねばいいのよ。

「で、話だけどよ。なんでもな、夜中の一時から三時のあいだに鏡乃神社で魔法陣を描いて呪文を唱えれば異世界に行けるんだってよ行けるわけないだろうが。」この話のどこに信憑性があるというんだ、こいつは。

「だから今日の一時半に現地集合な」

俺が行くの決定かよ。もしもトビに一般常識が通じるのなら、俺は限界突破200%で断るところなのだが、あいにく目の前で喜々としているあほうに一般常識は通じない。したがつて、

「……わかった

と返事をするしかないわけだ。

「よし、決まりだな。じゃあまたあとでな！」

キラツと歯を輝かせて男前スマイルを見せるあほつ。トビはそれだけいうと来たとき同様に窓から出て行つた。

「あいつ、約束を取り付けたためだけに来たのか

このクソ暑い中、それだけのために直接出向いてくる意味が分からん、っていうかメールで済むだろうに。まあ、別にいいんだが。

そんなことを思いつつ、俺は夜中という時間帯に備えるため、しばしの眠りにつくことにした。

鏡乃神社は地元で一番の規模を誇り、また、古い歴史をもつ重要文化財である。そのため、鏡乃神社には落ち武者が出るだの旧日本兵が出るだのと胡散臭い話が尽きない。去年の秋には猫耳をした人間が出たらしく、一部の層で話題になっていた。というか、猫耳だったら人間ではなくて妖怪だろうが。と思いながらトビに猫耳探索を手伝わされた後悔の秋。

去年のことを思い出しているうちに鏡乃神社に到着。鳥居周辺で

は十数人の不良っぽい人たちが呻きながら泣いていた。

「可哀そに」

おそらくトビに絡んでいて返り討ちにあつたのだろう。トビに絡むやからがまだいたとは思わなかつた。間庭市のキチがい、金子鳶春と言えば関東では有名なんだが。

「ひがつてゐるやつらを後日に、俺は無駄に長い石段いしだんを登つて行く。夜中で視界が悪く、慎重に歩を進めてよつやく境内へとたどり着いた。

境内の中央ではトビが何らかの液体を地面にぱらまいていた。取りあえずトビに近寄つていき声をかける。

「トビ」

「キキか、遅かつたな」

「しつかり間に合つように出てきた。で、何をしてるんだ？」

「魔法陣を描いてる。ペンキで」

「……お前、ペンキを消す道具は用意したのか？」

「用意する必要なんかないだろ。せっかく描いたものをどうして消すんだよ」

「こいつ凄えよ、重要文化財とかおかまいなしだよ。神社に魔法陣を残していく気まんなんだよ。

「それにだ、オレたちは異世界に行くんだから消すの無理だろ」

異世界とやらに行くこと前提で考えてうつしやるよこの人、誰か良い病院を知りませんかー？

「つし、完成」

俺が脳内突つ込みをしているうち、どうやら魔法陣とやらが完成したらしい。トビは持つていたペンキを魔法陣の外に置いた。

「これからどうするんだ？」

「魔法陣の中央で呪文を唱える。安心しな、呪文はすべてオレが創つてきたからよ」

創つたのか凄いなあほうだな。

「ああそう。じゃあ頑張れよ」

「言つて俺はトビから離れようと踵^{きびす}を返す。

「までまでまで、どこに行く氣だ。お前も魔法陣の中央に行くんだよ」

「俺にも呪文とやらを唱えろっていつのか?」

「いくら俺たち以外に人がいないとはいえ、そんな恥ずかしいことはごめんだ。」

「唱えるのはオレだけだ。異世界に行けるのは魔法陣のなかにいるやつ……っぽいだろ?」

そもそも行けないっての。というか訊かれても困る。

「わかつたから服を引っ張るな。中央に行けばいいんだな」

「おう」

何が『おう』だ、あほつが。そしてトビと並んで洪々と中央へと移動。

「じゃあ始めるわ」

「はいはい。さつとと済ませてファミレスに行くぞ」

「異世界にファミレスは無いだろ」

現実世界の話だっての。異世界に行けると信じて疑つてないな、こいつ。

横で呪文という名のキチがい詠唱を聞かされつつ、俺は胡坐^{あぐら}をかけて座る。さて、ファミレスで何を食べようか、などと考えているとだ。

風がでだした

夏だというのに、頬をなでる風は妙にひんやりとしている。ざわざわと音を発て、木々が騒ぎ出す。

降りそそぐ月明かりが強くなつた、気がした。

胸騒ぎがする、嫌な感じだ。思つてゆつくりと首だけを巡らせる。がらん、がらん、賽銭箱の後ろに吊るされている鈴が風に揺れていた。

ただ揺れているだけ、それだけだ。それだけなのに、鈴の音が、俺には不気味に聞こえた。

なんだかおかしい、言葉にはできないが、とにかくおかしい。頬を舐める風が、ざわざわと鳴いている木々が、がらんがらんと響く凶音が、不気味に輝く月が、無駄に俺の不安を煽り、搔きたてる。

「……おこ……トビ……なんだか様子がおかしい」

つぶやくと立ち上がり、トビに向ける。そして異常事態なんだと、俺はよけいに理解した。

トビはまるで生氣の感じられない瞳で、ふつぶつと聞いたことのない言語をつぶやいていた。俺はトビの両肩をつかみ、搖すつて必至になつて呼びかける。

「トビ、おこトビ……」

「反応はない。」

「しつかりし」

瞬間、周囲に光が満ちだした。トビの描いたでたらめな魔法陣の中が、まぶしいまでに光っている。

そして、満ちた光は閃光となつて弾けた

そのとき、人影を

「で、気づいたらだだつ広い草原でした。つでか……」

草が穏やかな風になびくなか、俺は、どうしてこうなつたと今までの行動を振り返っていた。周囲を、「オレは勇者だ！」いやッホーイ」と嬉しそうにあほうが飛び跳ねるなか、俺は頭を抱えて今世

紀最大のため息をついた。いや、人類史上最大のため息かもしれない。

「よう兄弟、宇宙規模のため息なんぞついてどうしたよ」

「誰が兄弟だ、殺すぞお前」

「あれ、怒ってる？」

「怒つてない。とんでもないことになつたと嘆いているんだ」

「そんなことよりよ、腹減ったから何か食おうぜ」

そんなことだと……？ わけのわからん場所に飛ばされたってのに、こいつにとつてはそんなことなのか。ああもう、ほんと殺したいわこいつ。

「なあ、キキ」

「なんだよつ！」

「なんかトラみたいなのに囮まれてるぞ」

「え……？」

いつの間にか、緑色の犬歯の長い、トラに良く似た動物に周囲を囮まれていた。お腹が空いているのか、ぐるぐると低いうなり声をあげている。

「あれだな。モンスターだ、きっと」

詰みましたっ、本当にありがとうございます…………

！！ いえアアアアアアアアアアアアアアアア…………

！！

1 - (1) キキ + あほう + 少女 = タイトル

「何を悶えてんだ、キキ」

そりやあ悶えるだらうがつ、わけのわからん別世界に飛ばされた
あげく、腹を空かせた緑色のトラみたいなのに周囲をかこまれてる
んだからよーー！

「前から思つてたんだけどよ、お前つて追い込まれると錯乱するよ
な」

「黙れあほうつ、全てお前のせいだらうが！」

「人のせいにするなよ」

「お前のせいなんだよおおおおーー！」

「落ち着けつてキキ。グリーンタイガー程度、オレが返り討ちにしてやんよつ」

「……お前、俺が逃げるまで囮になれよ」

「なるほどな。オレが囮になつている間にお前が逃げゆつてわけか。
さすがは智将キキだ」

いや、そう言つただらうが。どうして繰り返したんだといつは。
といつか智将とか止めてほしい。

あほうが意味不明なことをほざいてる間もグリーンタイガードも
は包囲をじりじりとせばめていた。

「ドビ、そりそろ来るぞ……

「だな」

一步、また一步と、呻り声は迫つてくる。

正直、生きた心地がしない。間違いなく、俺とドビは食い殺され
てしまうだらう。しかし、だからといって無抵抗でやられるつもり
はさらさらない。

『ぐれりと、俺は生睡なましを下す。

結果は田に見えていても、あきらめない。それが俺とドビだ。
握ったこぶしに力が入る。

「なあ、キキ」

「なんだ？」

トビが俺に背中を合わせる。

「オレさ、生き延びることができたら一組のゆづかやんに告白するよ」

それ、死亡フラグや。

あほうの死亡フラグに反応したのか、ついにグリーンタイガードもが動き出す。長い牙をきらりと光らせ、雄々しく大地を蹴り、一斉に飛びかかってきた。

「死んでたま」

少しばかり時をさかのぼる。

鏡乃神社で金子鳶春が呪文を唱えだしたころ、一人の少女がそれに気がついていた。正確には膨大な魔力の奔流を感じ取ったのだ。眠っていた少女は押しつぶされそうな感覚にたまらず飛び起きた。

「これは……」

近い。それも、かなり。思うが早く、少女は布団をはねのけて大きめのベレー帽を被ると家を飛び出した。

わき田もふらずに少女は駆ける。速い。中学生とは思えないほどに。

あの時と同じだ、また、門が開こうとしている。行かないといけない。

ふと、少女の頭を親代わりたる好々爺の暖かい笑顔がよぎった。郷愁の念に胸がしめつけられる。少しばかり走る速度が落ちた。

「ごめんなさい、おじいさん。でも、ミーニヤは行かないと。

少女は下唇を噛むと想いを振り切るかのように決意の表情をつくり、走る速度あげた。

いくつか珠の雫が、夜風にのつていた。。

少女にとつて鏡乃神社は良くも悪くも思い出深い場所であり、また、学校が終わると毎日来ていたため、見慣れた場所でもあった。しかしながら、こんな異常な雰囲気を醸し出す鏡乃神社を見るのは初めてだった。

「何よ、これは……」

鳥居の前から見る神社は魔力が渦巻く危険地帯となっていた。まるでコントロールされていない魔力は、誰かが張つたであろう強力な結界を壊さんばかりに叩き、のた打ち回っている。

もしも魔力が結界を破つて外に出てしまつたならば、魔力耐性の低い人間族では、最悪、死に至るかもしれないと彼女は恐怖する。事実、鳥居周辺でころがつている者達はすでに意識がなく、危険な状態であった。

「なんとかしないと」

少女は心を奮い発たせる。震える足を無理矢理に動かし、神社へと踏み入る。

とたん、飢えた猛獸のような魔力が彼女を襲う。

お気に入りのベレー帽が吹き飛び、舞い上がり、敷地内を無秩序に乱れ飛ぶ。しかし今はベレー帽などに構つてゐる暇はない。少女は風に目を細めつつ、鳥居周辺で氣絶している人を助けだすよりも先に、原因をどうにかすべきだと判断をした。

いくら強力な結界が神社に張られているとはいえ、一人一人を助けていては結界がもたないだろうと考えたのだ。彼女の判断は正しく、すでに結界の限界は近かつた。

心中で氣絶している人たちに謝ると同時に、無事であることを祈りながら彼女は輝く境内を目指す。風にはばまれながらも、彼女は石段を駆け上がる。そして、

境内へと辿りついた彼女は田にする。

輝きが閃光へと変わる瞬間。

異世界へと来てしまった自分を、救ってくれた、キキと呼ばれていた少年を

荒れ狂っていた風が穏やかなものへと変わりつつあった。ゆっくりと、高密度の魔力が霧散していく。

境内には少女が一人。先程まで境内の中央にいた少年たちの姿はそこにはない。

ペタンと、その場に少女は座りこんでしまう。胸が高鳴っていた。茫然自失とは、今の彼女の状態である。

間違いない、あの人だ。一年前のことと思い出し、カツと顔が赤くなる。胸の高鳴りはいつそう大きくなっていた。

からんからんと、甲高い鈴の音が少女の耳に入ってくる。それで、はたと我に返った。

なにをボーっとしているんだ、こんなことをしている暇はない。思つて彼女は立ち上がり、つい先程まで想い人が立つていた中央へと足を運ぶ。

「魔術陣……？」

お昼に来たときにはこんなものはなかつたはずのに、と不思議におもいつつそれを観察してみる。

「凄い、なんて高度な魔術陣なんだろう」

魔術に詳しくないとはいえ、少しばかり心得のある彼女は感嘆のつぶやきを洩らした。もはやそれは魔術の域を超えた魔法陣とよべるものだった。魔術を極めた者だけが行使できる最上の術が魔法である。

まさか、魔術すら存在しないこの世界に魔法を使える人がいるなんてと彼女は思う。

少女の元いた世界ではともかく、こちらの世界には魔術師や魔法使いなどはない。ただ、でたらめに描いたものを魔法陣としてし

まう奇跡的な阿呆はいるが。

「……陣が残つてゐるのなら」

戻れるかもしない。元の世界に、そして、あの人を助けないと。
決意をし、すつと目を閉じて集中をする。足りない魔力はいまだ
周囲で霧散せずに残つてゐる分で補うとして、、して、、、どうし
よう、世界を渡る魔法の詠唱なんて知らないよつ。
うにゅうー、などと彼女は妙な呻き声を洩らす。
するとだ、唐突に彼女の呻きが途切れた。
そして彼女は唱えだす、知らないはずの呪文を。
世界の壁を超える魔法を。

まるで、何者かに操られているかのよつ。

四方から跳びかかるグリーンタイガーに対し、俺は雄叫びをあげながら立ち向かう。

と馬鹿がけてスライミングケーブル

完璧なるフュイントをかまし、跳ひかかってきたやつらの下を滑りぬける。真正面から戦うとか馬鹿のすることだしな。グリーンタイガーの後ろをとった俺はすかさず態勢を整える。そして見た。そして知る。

信し得れないことに、トビがケーランタイガ一頭の前足を掴んでジャイアントスイングをかましていた。その様はさながら旋風であり、次々と周りにいた猛虎たちは吹き飛んでいく。どうやらあほうはグリーンタイガーを装備したらしい。

相變わらず出鱈目なやつ……

「どうかだ、俺がストライティングをせずに迎撃をしていたら、俺もジャイアントスイングに巻き込まれていたのではなかろうか？」

「しゃあつ、オレ無双！！」

ああ、そうだな。無双し過ぎて味方すらやつちまうところだったけどな。トビに投げ捨てられて矢のように飛んでいく哀れなグリーンタイガーを目で追いつつ、俺はそんなことを思っていた。

あ
！

うぞコテンシヨンだな。といつか他のやつらせ吹き飛ばされたあ

とに逃げたつての。

「やる気まんまんなどこの悪いんだがな、お前の敵味方関係ねえ無

双のおかげでグリーンタイガーどもは撤退したぞ

「マジか」

「ああマジだ」

「追うぞっ」

「までまでまでっ。どうして追う必要がある」

今にも駆けださんとしていたトビの肩をつかんで制止する。せつ
かく追い払ったというのに、自ら危機に足を踏み入れる必要はない。

「逃げられたら経験値が入らないだろ？」

なんというゲーム脳。ついにリアルとゲームの区別がつかなくな
つたようだ。

「残念なことにだ、グリーンタイガーを倒しても経験値は入らん」

「そんな馬鹿な」

安心しろ、お前はあほうだ。

「どうとかキキ、これからどうするよ」

どうしてあほうやバカってのは、いつも簡単に話題を変えるのか。
まあ、経験値うんぬんの話を引っ張られても困るのだが。

さて、本当にどうしたものか。さきほど襲ってきた地球外生命体、
いや、別世界生命体を見る限り、俺とトビは異世界に飛ばされたと
仮定してしかるべきだろ。そのように仮定した場合、やはり元の
世界に帰ることを目標にしたい。グリーンタイガーみたいな怪物が
いる世界については命がいくつあってもたりないからな。

「なあキキ、取りあえずどっかで飯食おうぜ」

どつかつてどこだよ、あほうが。なんにせよ、こちらの世界の住
人と「ンタクトをとるべきだな。

「言葉が通じるといいんだが……」

人間でなくともいいので、最低でも意思疎通ができる」とを祈る
う。

「おい、聞いてんのかキキ」

「聞いて」

言い終えようとしたとき、俺は視界のなかに浮かぶ光の珠に気が

付いた。どうやら光の珠は俺たちの足元から立ち昇つており、素つ
気ないただの草原を幻想的なものへと変えていた。

「なかなか綺麗だな」

トビは周囲に浮かぶ光の珠を見つつ、のんきにそんなことを口にした。俺としては、今度はなんだ、また何か起きるのかといささか呆れていた。

光の珠が強く輝きだす。

まふしきのあまり口を細めてしまふ。次に輝きは閃光となり、俺は口を開けていられなくなつた。

卷之三

そして閃光は弾け飛んだ。一緒にトイも弾け飛べばいいのに。

などと至極当然なことを思いながらも、強烈な火の湯が過ぎ去ったのを感じた俺はゆっくりとまぶたを上げた。と、横のあほうが叫び出す。

卷之三

見ると、あほうは手で目を覆い、草の上をもんじりうつていた。何を思ったのかは知らんが、察するに閃光を直視したのだろう。前々から分かつてはいたが、やはり救いようのないあほうだ。しばらくは何も見えないだろう。それだけならばまだいい、最悪の場合、失明しているかもしない。

まあ、どうでもいいことだ。

そんなことよりも、まずは状況の把握だ。閃光が弾ける前と後で変化したところがないかと思い、周囲の状況を確認してみる。何者かと、目が合った。

- 1 -

そいつは立っていた。何をするわけでもない。ただ、茫然と突つ

立っていた。

少女だった。肩までの鮮やかな金髪、その前髪が風に靡いている。

吸い込まれそうなまでの綺麗な瞳。蒼と紅の、オッドアイ。

桃色の小さく瑞々しい唇が言葉を紡ぐのです。しかし言葉は紡

がれず、閉じられた。

「うお、耳付いてる」

行き成りだつた。トビが俺の肩越しから言い放つた。どうやら俺はボーッとしていたらしく、その一言に驚いて少しばかり身体を弾ませてしまった。

「当たり前だる、人間……なんだ……から……」

頭に何か付いたる。猫耳のよつな……

「へイ、そこの猫耳彼女っ！ オレ今、目が逝つて色の識別できないうけどお茶しなさい？」

かつる！ そしてナンパ文句が斬新過ぎる。というか、どうして猫耳が付いているんだとか、いつの間に居たのか、だとか気にならないのかアイツは。

「すつごいねえ、それ地耳？」

地耳ってなんだ。初めて聞いたわ。

「え、その、」

「さわるから」

まさかの断定。わすがはトビ。

「いやつ！」

トビに耳を触られ、驚きの声をあげる猫耳少女。

「マジか、地耳だ。なんか、でも、引っこ抜けそうだな」

「うにゃあつ」

ぐいぐいと耳を引っ張るトビ。猫耳少女は半泣きになつていて、今にも本泣きしそうだつた。といふか、にやにやあと少女がうるるこので、トビを止めることにする。

「トビ、手を離してやれ。いい加減にしないと泣くぞ、その子」

「泣かれる嫌だな、わかった」

言ってトビは耳から手を離す。無茶苦茶なやつではあるが、トビ

は女の子を泣かせて喜ぶような悪人ではけつしてない。俺は一人に近寄る。

「あうあう……」

情けない声を出して耳をわする少女。あうあうて……こいつぶりつ子じやないだらうな。

「なに？ このリアル萌え少女」

「知るか」

それにしても猫耳とはな。俺たちの世界にこんな珍妙なものは存在しないので、十中八九こちらの世界の住人だらう。

「あんた、この世界の住人だよな。色々と訊きたいことがあるんだが、いいか？」

少女は俺の問いかけに対し、ボーッと俺を見つめてくるばかりでいつこうに答えない。もしかしたら言葉が通じていないかも知れない。ここは異世界だ、有りえないことではないし、むしろ、その可能性のほうが高いといえる。

「言葉、通じてるか？」

改めて訊いてみると、すると、少女はうるさいと瞳を揺らし始めた。両の手を豊かな胸の前で合わせ、なぜか、感極まつた声でこいつぶつた。

「優しく……してほしいにゃ」

こいつ気持ち悪い。

初対面の人に向かつて優しくしてくだせことか、なんなの」につけ。
何を求めてるんだこいつけ。

「大胆なやつだな。よし、犯るかキキ

「犯らん、あほう

まったく、これだから万年発情期のあほうは。

「あ、あのっ！」

トビに呆れて「ると、ぐーっと行き成り身を乗り出してきた少女。
つて近い近い。

「ありがとう」ござこましたですにゃ！」

お礼をのべるなり、今度は勢い良く頭を下げる。もつ、俺にはなんのこじやりわつけりだ。ビーブして初対面の女子、それも異世界の猫耳少女にお礼を言われているんだ俺は。

「キキつてこの猫耳と知り合いなのか？」

「そんなわけないだろ、間違いなく初対面だ」

猫耳の少女になんか出会つていたら忘れたくとも忘れられるわけがない。例え痴呆症になつたとしても覚えている自信がある。

「あのや、俺はあんたに優しくしてくれだとか、ありがとうだとか言われる理由がないんだけど。誰かと勘違いしてないか？ そもそも、俺とあんたは初対面だろ？」

少女はゆつくりと頭を上げ、俺の顔をジッと見る。しばし凝視したあと、少女は口を開いた。

「あなたで間違いないですにやつ、向こうの世界に行つてしまつた

ミーニャを

「ちょおおつと待てつ」

俺の耳が確かなら、いま、田の前で首を傾げているやつは、向こうの世界に行つて などと口にしたか？

「あんた、俺と同じ世界からこの世界にきたのか？」

「あ、はい。でもミーニャは、もともとはこの世界の住人なのです
にや」

二
「せに

「つまり、俺たちの世界に行つたあと、こちらの世界に戻ってきた
といふことか？」

「アーニーはアーニーにならぬか？」

少女の言つことが本当だとしたら、この世界には世界間を行き来する何らかの方法が確立されているのかもしれない。もし、そうなればこれ以上の朗報はない。なにせ、簡単に元の世界に帰れるのだから。

「この世界では世界間の行き来する方法が確立されているのか？」
期待を胸こぎてみる。

「それでませんでしょ」

即答されました、どうもありがとうございました。

「おしゃれ」「なんだよ、くだらなー」とながめられ

「オレ、なんか空氣じゃね？」

「へだらぬー。」

頼むから

「あの、」

アーラがかるべつておこなはれど、おまけにアーラが口をせんじ

七
二

「ああ、舞座のやうで、近づいておきましらう。

「それは助かるが、思いますつて、また曖昧なんだな」

「ア、『めんなさ』ですにゃ。もう、一年ちかく帰つてないので…

1

「ああそうか、俺の元いた世界に居たんだもんなど納得。 とりあえず、落ち着ける場所で話ができるのはありがたい。

「それは助かる。 あんたさえよければ、是非にお願いしたい」

「それは助かる。あんたさえよければ、是非にお

「ああそこが俺の元いた世界に居たんだもんなど納得 とりあえず、落ち着ける場所で話ができるのはありがたい。

「それは助かる。あんたさえよければ、是非にお願いしたい」

「はいっ、こちらです、着いてきてください」

何が嬉しいのか、満面の笑みで言つなりくると背を向けて着いてくるよつこにうながす少女。

「しつぽつこどる

少女の腰あたりでフワフワと左右に揺れるしつぽ。それにトビは好機の視線を向けている。

「トビ、掴むなよ

「え、ダメなのか？」

「ダメだ。触りたいのなら家に着いた後で了解を得てからにしつ

「うむ

なにがうむだ、あほうが。

俺とトビは草原を歩きつつ、この世界について少女に色々と質問をしていた。例えば、『この世界で日本語は通じるのか』『通貨はあるのか』『中心となっている技術は何か』などである。これらの質問に対し、俺は簡単な答えしかもらっていない。詳しくは家に着いてから訊くつもりだ。

今はトビが質問をしていて、『胸でかいな、何カツプ』とくだらないことを訊いていた。そのあいだ、俺は彼女に訊いたことを自分なりにまとめていた。

この世界は『魔術』技術というものが発達しているらしいが、社会通念などは俺たちの居た世界とはほとんど変わらないらしい。科学の変わりに魔術、という程度のものなのだろう。したがって、通貨の概念は当然のように存在し、生きていくためには労働をしてお金稼ぐか、作物や狩りをして糧を得なければならぬ。まったく、どこの世界も世知辛いものだ。

それと、言語に関しては種族間で違うらしく、当然のように日本語は通じないのことだ。猫耳少女に日本語が通じるのは、彼女が日本に住んでいたからに他ならない。ただし、言語に関しては魔術道具でどうにかなるらしい。俺たちの世界でいう翻訳機のような物

があるのでない。

「キキ、キキッ、キキ！」

訊いた話を整理していると、トビが俺の名前を連呼しているのに気が付く。どうにも、集中していたらしく。

「大声を出すな。で、なんだ？」

「着いたって」

「ん？」

言われて今更ながらに気づく。田の前に木造の小屋が建っていることに。

「……隨分と綺麗だな」

一年ちかくも空けていたといつに、小屋とその周辺は妙に整然としていた。綺麗に磨かれた小屋、短く切りそろえられた草、手入れのいきとどいた花壇……どう見ても人の手が入っている。

「うお、見たことない花がある」

少年のようにきらきらと田を輝かせ、窓下の花壇へと向かっているトビはほおつておき、不思議そうに小屋を見つめている少女に声をかける。

「猫耳少女」

「いや？」

「あなたの家つてのはここので間違いないのか？ 一年ちかく帰っていないにしては手入れがいきとどいているみたいだが」

「その、はずなんですけどにゃ……」

はて、と少女は首を傾げる。別に不思議がることはないと思うんだがな。少し考えれば、留守にしている間に誰かが住み着いたと予想がつきそなものが。

「あなたが家を空けている間に誰かが住みついたんじゃないのか？」

「そりなんですかにゃ？」

「いや、知らないけど。」

「お、なんか居る」

ふとトビが声が発したと思つと、間髪もなく、ガツシャーン！

などというガラスの破碎音が響き渡つた。俺と少女は反射的に音の方角へと顔を向けた。

「キキ。なんか捕まえたぞ」

「つづれしそうに言葉にするアビ。見ると、あほうが花壇の上に備え付いていた窓ガラスを粉碎し、中に手を突っ込んでいた。どうやら、窓ガラスをぶち破つて中に居た何かを、もしくは誰かを捕まえたらしい。

「ほんと、やくなことをしないなお前は」

「まあな！」

褒めてないっての。どんだけポジティブなんだよ。

「にゃにゃ、窓が！」

どんまい、猫耳少女。

「離せー離せー！」

と、いやに可愛らしき声が小屋の中から聞こえてきた。声の感じからするに、トビが捕まえたのは女の子らしい。なんだか犯罪の臭いがする。

「おお。この虫じゃべるが、キキ」

虫……だと……？

「この声……」

「トビ……とりあえず捕まえたのを見せてくれないか？」

「おう」

きやつ、という小さな悲鳴と同時に出てきたもの、トビの手に握られていたそれは。

なんかもう、生物？ 精霊？ なんというか、妖精？
妖精つて……。

「リーリーHちゃんつ」
つと、呆けている場合じやない。トビに足を掴まれ、ふらんぶらんともがく妖精を見るなり、少女は妖精へと駆け寄つて行つた。

「この虫、猫耳のか？」

「あたしは虫じやないやい、妖精族のリーリ工なの！ それより離してよ！」

「トビ、離してやれ！」

「ん、わかつた」

返事をするなり、パツと手を離すトビ。おかげで妖精は地面にキスだ。痛そうだな。

「い、痛い……」

小さすぎる手で鼻をこいつつ、妖精は少女に顔を向ける。そして、「ミーーャあ！」などと甘々な気持ち悪い声をだして彼女に抱き着いた。

「よしよし、大丈夫かにゃ？」

しゃがみこみ、優しく頭をなでる少女。俺はなでられている妖精をまじまじと見てしまつ。

大きさは小学生の低学年ほどであり、一見すると人間のようではあるが、背にはトンボのような四枚の小さな羽が付いている。髪の色は黄緑色っぽく、髪型はボリュームのある髪をサイドでまとめた、サイドボニー・テールとなつていて。顔は良く整つており、リングホツペが特徴的だ。美幼女？ つて部類に入るんだろうな。いかんな、なんだか口リコンみたいではないか、俺は。

「……うん。それより、今までどこに行つてたの？ ミーーャが居なくなつてから、凄い大変だつたんだからあ」

あつーと、会話の流れから話が長くなる予感がする。

「大変だつたつて、街で何かあつたにゃ？」

「うん。あのね、」

さて、悪いが遮らせてもらひつか。このまま置き去りにされて話を進められる非常に困る。

「ああと。悪いんだがな、ひとまず中に入らないか？」

「え、あ、はい。そうです」や

中に入った俺たちは少女にうながされるがまま、手作り感たっぷりのちやぶ台に着いた。少女はいま飲み物を入れてくれている。

「すつげ、RPGの民家みたいだ」

辺りを見回しつつ、トビがそんなことをつぶやいた。トビの言う通りで、家中は中世ヨーロッパのような雰囲気が漂つており、ほとんどの物が木で出来ていた。プラスチック製の物は一切なく、鉄製の物は調理器具といった感じで一部にしか使われていない。この世界で鉄は貴重なかもしれない。

「ねえ」

部屋を見渡していたら、俺の隣りでちょこんと座っている妖精に話しかけられた。大きくつぶらな瞳がジックと見ている。

「なんだよ」

「ミーニャのお友達なの？」

「そんなどろだ」

俺の適当な返事を聞いた妖精は何やら考え方をし、「ふーん」と言つて正面を向いた。

「ねえ。あの乱暴者もミーニャのお友達なの？」

しばりくして、タンスを漁るトビを指差してまたもや話かけてきた。

「ああ」

まとめて訊けよ、めんどくさいな。

と、飲み物を運ぼうとしていた少女がトビに気づいた。トビは綿で出来た簡素な女性下着を手に、「あれ、パンツひけせえ」などとつぶやいている。

「ねえ。リーリエも……」

隣りでも「も」と言いよどんでいる妖精を無視し、俺は、真っ赤になつた少女とトビのパンツ縛引きを見ていた。「何をしてるんですかにや、返してくださいにや！」むーむーと、必死になつてトビから下着を取り返そうとしている少女。対するトビは、「なあパンツくれよこのパンツくれよ」と余裕の表情で最低なことを言つている。

見ていて面白いので、しばらくそのままにしておく。

「だからね、リーリエとも、お友達になつてほしいの」

ふと、隣りから遠慮がちな声が耳に入つてきた。見ると、うつむき加減で妖精がいじいじと床にのの字を書いている。ずっと俺に話してかけていたみたいだが、俺が聞き取つたのは友達うんぬんの件だけだった。

何を言つてたんだろうかと思い、妖精を見ていると、妖精がちらりと俺を盗み見た。そして。

「リーリエいい子だから、お友達になるといいことつぱいあるのにな……」

またもや、ちらりと俺を盗み見る。

そんなアピールいらないつての、めんどくさいやつだな。

「わかつたから、ちらちらと見るな」

「お友達になつてくれるの？」

「ああ、なつてやる」

「ありがとう、リーリエはリーリエって言うのー」

「ああそう。喜衛喜々だ、呼ぶときはキキで頼む」

「うんっ」

にぱーっと満面の笑みで笑うリーリエ。どうもやつずらい。改めて、俺は子供が苦手なんだと思い知つたよ、まったく。

「あ、千切れた」

パンツ縛引きに動きがあつたよつだ。トビのつぶやきに、視線をそちらへと戻すと下着は見事に引きちぎれて二つになつっていた。引

き千切れたときの勢いだろ？、少女は家具に頭をぶつけている。なんとも間抜けなこつて。

「ところどはアレだな。片方はオレがもらつていこつてことだな」「なぜ、やうなる。どんだけ下着欲しいんだエロあほ？」「痛いにや……」「ひ、ミーニャの下着が」

「大丈夫なのか、ミーニャ！」

慌てて駆け寄るリーリH、そして彼女は少女を庇うよつて前に出かばると、精一杯の怖い顔をつくつてトビを睨みつける。

「乱暴者めつ、ミーニャに謝れ！」

「なんだ、やる気か虫娘？」

トビの一言に、はうつ、と小さな悲鳴をあげるリーリH。最初の勢いはどうぐへと消失だ。

「リーリH、すごに強いから、やめておいたほつがいいと思つなあ——」

視線は明後日の方向へ向けつつ、そんなことをのたまつビクビク妖精のリーリH。

「強いつてどねぐらいだ？」

あほうが喰いつく。

「ド、ドラゴンくらい……」

基準がわからんつての。

「マジか、すげえな！」

なぜだ、なぜ架空の存在を比較対象にされて、すげえなんて言葉が出てくるんだ。お前がドラゴンの何を知つてこる。

「待てよ？ お前を倒せばオレはドラゴンを倒したことになるんだな……」

いやいやいや、ならないつて。

「そ、そうなる」

いや、ならないって。自分から死亡フラグを建ててどうするより——H。あほうが次に言いそなことなど予想がつきそなものだがな。

「決めた。お前を倒し、オレは勇者になる。」

リーリH=ドリゴン=悪の親王、討伐=勇者、ジツヤウトビの頭の中ではそう結びついたらしい。人類の理解を超えていやがる。予想の遙か彼方だ。

「ままままで待て」

焦りまくるリーリH。もう少しだけあほあほコントを見ていきたい気もするが、これ以上トビをほおつておくとリーリHがフルボッコにされるので幕を下ろしてもらうことにする。

「楽しんでるところ悪いんだが、そろそろ話しあなこをするぞ

「あ、そうですね。すぐに飲み物を持つていきますにゃ」

今までリーリエとトビのやり取りをぽかんと見ていた少女が立ち上がる。

「つむづむ、乱暴者と戦うのは後だな！」

「キキ、話は虫娘を倒してからでいいか？」

ひい、などとまたもや悲鳴をあげ、小走りで俺の背に身を隠すリーリエ。トビもそつだが、リーリエもめんどくせこじのうえなーい。

「ダメだ。あまり言いたかないが、おれとリーリエは友達だからな、ケンカは無しだ」

「マジか」

「マジだ」

「ラスボスとダチとか、キキすげえな」

何がラスボスだ、あほうが。ほんと疲れる。

「まあな、お前も友達になつとけ」

「お前の友達はオレのダチだらうが」

「なに、そのジャイアニズム、どこの剛田さん？」

「なんと、リーリエと乱暴者はすでに友達だったのか！？」

もうめんどくさい、こいつらめんどくさい。

らしいな。お前みたいなラスボスとダチになれるとは、公園だぜ「

公園じゃなくて光栄だ、遊びに行つてこいあほう。

「うむ。お友達ならば仲良くなればな。リーリエはリーリエ、よろしくなー。」

「オレはトビって呼んでくれなつ」

「お友達が増えて良かつたにゃ、リーリエちゃん」

柔軟な笑みを浮かべて言うと、少女は飲み物が入った木製カップを手際良くテーブルに並べていく。

「うむ！」

うつさいな、人の耳元で大声出すなつての。

「リーリエ、座れ」

「うむ」

たたたと駆けて空いている場所に座るリーリエ、その隣りに、飲み物を配り終えた少女が腰を下ろす。トビは俺の隣りで足を投げ出して寝転んでいる。

ようやく話し合いの場が整つたということだろう。

「ああそうだ、まずはあなたの名前を聞いておきたいんだが」
ずっと気になかつてはいたのだが、俺は少女の名前を正式には訊いていなかつた。まあ、ミーニャミーニャと連呼していたので名前じたいは知つているんだが。

「あ、はい。ミーニャですにゃ」

顔を赤くし、うつむき加減で答えるミーニャ。照れてるのか？

「まあいいや、俺は喜衛喜々、寝転がってるのが金子鳶春。呼ぶときはキキとトビで頼む。ところで、苗字はないのか？」

「この世界で苗字を名乗れるのは貴族様だけですにゃ」

貴族ときたか。苗字によつて貴族とそうでない者を区別、いや、

「あまり苗字を名乗らないほうがいいか？」

「……はい、お察しの通りですにゃ」

どどのつまり、この世界は貴族制度による身分差があり、区別ではなく差別が行われているということだ。

差別ということとは、この世界は貴族が取り仕切る社会制度だと容易に想像がつく。ミーニャの苦笑を見る限り、貴族がそうでない者を虐げ、得をする世界なのだろう。

吐き気がしやがる。

「キキとトビは貴族なのか、……？」

大きな瞳に不安の色を乗せ、リーリエが訊いてくる。フルネームで名乗つたはずなのだが、どうやらリーリエは苗字に気づかなかつたようだ。

「そんな顔をするな。確かに俺たちには苗字があるが、貴族じゃない。勝手に苗字を名乗っているだけのあほうだ」

別に異世界から来たことを隠すわけではないが、好奇心旺盛（じつけいしんおうせい）そうなリーリエにそのことを話すと質問の嵐にあいそつなので、そういうことにしておく。

「……本当？」

「ああ。だよな、ミーニャ」

「は、はい。リーリエちゃん。キキさんははとつても良い人だにや。怖がらなくとも大丈夫」

「うむ……」

リーリエは随分と貴族に酷い目にあわされたらしく、ミーニャに抱かれ、今にも泣きそうな表情となっていた。

「お前、貴族つてのに何かされたのか？」

寝転がつたまま、トビがリーリエに訊いた。

沈黙が場を満たす。

しばしの間を得て、嗚咽おえいが洟れ出した。

「リーリエちゃん……街で、何かあつたんだね？」

ミーニヤに抱かれた腕の隙間から、こくりとうなずくリーリエが見えた。

「リーリエ、妖精属で珍しいから。領主様が欲しつて……無理に連れて行こうとして……でも、街の人たちが守ってくれて、逃がしてくれた」

「そう、だからミーニヤの家に居たんだにゃ……」

「ずっと一人で寂しかった、街のみんな、すごいすごい心配だったけど、リーリエ、本当は弱つちいから、行けなかつた」

そう、たどたどしく口にしたリーリエ。止めどなく落ちる雫、それは、彼女の寂しさと悔しさ、なにより、街の人を思う気持ちであふれ返っていた。

寂しかったからこそ、彼女は俺なんかでも友達を欲したのだろう。守られるだけで何もできなかつた自分が悔しかつたからこそ、彼

女はリーリヤを守ろうとドビに向かっていったのだろう。

「いらっしゃることだ。仕方ない、話し合いは中断だ。

「街とやらに行くぞ」

「俺は立ち上がりつつ、口元した。

「キキ……でも……」

リーリエは街に戻るのが怖いんだろう。分からなくはない、なぜなら、リーリエを逃がしたことで街の者がどのような目にあつたのかなど、言つまでもない。自分のせいで街の者に辛い想いをさせてしまつたのだ、嫌われたと思うのが普通だろう。

けどな。

「でも、じゃない。怖がる必要はない。みんなお前が無事なのか心配しているはずだ」

街の者はリーリエを逃がしたことにより辛い目に合つことは分かつていたはずだ。そんなのは覚悟のうえで、クソ貴族のクソ領主に刃向つたに違いないのだ。もしもそういう無く、戻つて来たリーリエに罵声を浴びせるやつがいるとしたら、そいつはただのクズだ。「リーリエが戻つたら、また、街のみんなに迷惑がかからない……？」

「かかりやしないって。え、何故かって？　俺がクソ貴族のクソ領主をフルボッコにするからな」

「ダ、ダメですにゃ、貴族様に手を出せばこの世界で生き辛くなってしまいますにゃ！」

そんなことは百も承知だ。街のやつらの後のことを考えれば、とんでもない最悪な行動だということも理解している。でもな、そんなことは『後』でどうにかしてやるよ。

「知ったことか、友達を泣かせたままのほうが生き辛いんだよ、俺は」

まずは泣いている友達を笑顔にするのが先なんだ。

「キキさん……」

「完全にスイッチが入っちゃつたな」

トジがむくりと起き上がり、しゃつしゃつと首を鳴らす。

「やるか、キキ」

「当たり前だ。//ニーニヤ、案内だけでいいから街に連れて行つてくれ。頼む」

真っ直ぐに//ニーニヤを見つめ、あらん限りの気持ちを瞳にのせた。少しして、

「キキさんは、もつと落ち着いた方だと思つていましたにゃ」「イメージ違いで悪かつたな。どうにも、俺は子供らしくくな」

「というかキキはあほうだ」

トジにあほう言われると腹が立つてくるな。クソ貴族の前にこいつをフルボッコにしてやろうか。

「でも、お優しい方ですにゃ」

慈しむような、なんか、そんな笑顔で彼女は言った。凄い背中がかゆくなる。

「リーリエちゃん。街に行こうか」

//ニーニヤの問いかけに対し、リーリエに全員の視線が集まる。

「……でも、」

「でもはいらない。何もかも、俺たちがどうにかしてやるから。リーリエがすることは、もつとも難しい、友達を信じる、といつことだけだ」

まったく、なんといつこうことを言つてゐるんだ、俺は……

「……うん。みんなを、信じる」

泣き腫れた顔で、彼女は遠慮がちに、だが、確かに、笑つた。

これは、とある老人の語りである。

オルベールの街は大草原のど真ん中に位置する田舎町で、昔からさびれた街だった。しかし、前任の領主、オルタ・ラーセンによつて街は活氣ある栄えた街に変わった。

オルタ・ラーセンは元は王都所属の貴族であり、無階級層、つまりは平民を第一に考えて政策を執る親民派といわれていた。眞面目で慈悲深く、また、その政治手腕は他の貴族よりも頭一つ抜きん出していた。

そんな彼が田舎街に赴任することになったのは、なにも、オルベールを活性化させるためではない。他の貴族に疎まれていた彼は、謀略によつて王都を追い出され、オルベールへと左遷されたのである。

しかし彼は腐らなかつた。

オルベールに着くやいなや、まるで活氣のない街を嘆き、積極的に街の者と関わりをもつて町興しを始めたのだ。

敏腕のオルタをもつてしても、特産物もなければ觀光名所もない街で金を生み出すのは難しかつた。けれども彼は諦めず、どうにかできなかつと日々、頭を抱えていた。

そんな時だつた。ふらりと、妖精がやつてきたのは。

妖精属が人前に姿を見せるのは珍しく、ここ数百年では目撃例すらなかつた。オルタはすぐ、宿で保護されている妖精に会いに出向いた。

妖精は幼かつた。オルタを見た妖精は駆け寄つていくと、開口一

番、こう言った。「リーリエ、いい子だからお友達になると良いこといっぱいあるなあ……」と。その日、妖精はオルタの友人となつた。

妖精は無邪氣で心優しく、誰よりも笑顔が似合う可憐な子だつた。彼女は街の者に可愛がられ、愛されていた。また、彼女も街のみんなが大好きだつた。

ある日、彼女は街の人々のために何かできることはないかと、オルタに相談を持ちかけた。

街のみんなに恩返しをしたい、みんなに喜んでほしい。あまりにも純真無垢な想いに、オルタは泣々、「みんなのために見世物になる気はあるかい?」と告げた。良く意味の分かつていらない幼い友人のため、彼は囁み碎いて説明をする。

話を理解した妖精は寸分の迷いもなく、満面の笑みで、「みんなが喜ぶのなら見世物でもなんでもするぞ!」と、返事をした。

その後のオルタは凄まじいものがあつた。住民に彼女の想いを伝え、街の者と一丸となつて行動を始めた。

まずは私財を投げ売つて街と王都をつなぐ街道の整備を行い、次に夜盗や魔物対策のため、獣人族に街道の警備を頼み込んだ。獣人族は人間族よりも身体能力が高く、戦闘に長けた種族であり、ゆいいつ人間族に友好的な種族である。

獣人族の協力もあり、街道の安全が保障されると、オルタは王都や各地の街から商人を呼び寄せて妖精の存在をさり気なく見せつけた。オルベルの街から帰つた商人たちにより、瞬く間に妖精の存在は大陸中に広がり、オルベルの街は観光客であふれ返り、宿や酒場といった店が大繁盛し、街の者が総出で作つたリーリエ人形が飛びように売れた。

これにより、オルベルは活気に満ちた豊かな街となつた。

しかし、栄華は長くは続かなかつた。

突如、オルタ・ラーセンが領主の任を解かれたのだ。獣人族との独断交渉の責を問われ。

オルタ程の男に抜かりはない。街道の安全強化を名目に、しつかりと王都より許可を得てから獣人族の協力を取り付けており、許可状も持っていた。だが、オルタの目覚ましい活躍を快く思わない貴族たちによって、彼の持つ許可状は偽造とされた。金と、権力がものをいう社会なのだ、この世界の貴族社会は。

オルタは領主の任を解かれただけでなく、苗字をも剥奪はくだつされた。貴族にとつて苗字の剥奪、それ、すなわち、平民になるということだ。

オルタの後任に着いたのは、ゲローブ・ランセンこうじんといふ一般的な貴族だった。一般的、つまりは無能で強欲じょうよくといふことである。

ゲローブは欲した。妖精を、コレクションとして。

街の広場、そこで妖精はいつものように街に来た観光客と遊んでいた。彼女にしては遊びだが、それは街の催あつしの一つで、キキたちの世界でいうところの鬼ごっこである。皆が楽しそうにしているなか、そこに、ゲローブ率ますいる騎士団きしどんがやつてきた。

剣を携たすえ、重厚な鎧よまとを纏まつった騎士団と貴族たるゲローブの登場に、場は一斉に静まり返かった。重々しい空気が流れる中、妖精はゲローブへと駆け寄り、「一緒に遊ぶのか?」とにんまりと満面の笑みで問とうた。

答えは、蹴りで返かってきた。

ゲローブは妖精の腹部へと蹴りをみまい、「気安く話しかけるでない、物は黙つておれ」と吐き捨てた。騎士団に命ずる、一言、連れて行けど。

妖精はなす術すべもなく、髪を無造作に引っ掴まれ、痛い、痛いと、悲痛な声をあげている。誰も助けには入らない、うつむいて地面を見るばかりである。貴族に逆らっては命に係わる、離せと言おうものならば、国家反逆罪として一族郎党打ち首となる。ましてや、戦闘訓練をうけた騎士たちに平民がかなう訳もない。

例え子供が痛みと悲しみに泣きわめいていても、どんなに愛らしい子であつても、貴族がすることには口を挟まないのが賢い生き方

なのである。

ただ、どこの世界にも馬鹿は居るものだ。

オルタ・ラーセン、いや、オルタは馬鹿だった。彼は広場の出口で、たつた一人、ゲローブたち騎士団の前に立ち塞がつた。貴族の頃に召して^めいた立派な衣服は簡素な布でできた服へと変わり、腰に帯びていた家宝の剣^{（けん）}は今やなく、手に握られるは鍬^{（くわ）}である。彼に貴族の面影はどこにもなかつた。

ゲローブは笑う。^{（しゅう）}醜惡な顔をさらに歪ませ、肥えた腹^{（はら）}を愉快氣に叩き、かつて、やり手の貴族として名を馳せた男を。

オルタは叫んだ。ゲローブの笑い声などかき消すほどの声で、たつた一言。

「友よつ、いまつ、助けるぞ…………！」

騎士団を相手に、彼は鍬を手に立ち向かう。ゲローブを無視し、一目散に妖精を掴む兵士へと襲いかかる。瞬く間に場は騒然となつた。騎士団は咄嗟^{（とっさ）}に迎撃を試みるも、邪魔が入つた。

オルタは苗字を剥奪され、そのさいに財産も失つた。

しかし、彼を慕う民の心までは、失つてはいなかつた。

オルタ様を護れど、リーリエを助けると、その場にいた街の者が理性の介入よりも早く、身体が動いたのである。

大乱戦のさなか、妖精は街の者の手によって、草原の監視小屋たる、獣人族のミーニャの家へと逃がされた

「なんて言つてんの、このじじい？」

「俺に訊くなよ」

いま、俺たちはリーリエが以前住んでいた街に来ており、そこで出会つた老人に家へと招かれ、なんか良く分からん話を聞き終わつ

たところ……だと思う。感じ的に。

言葉が分からぬ、といふか、言語が違うので何を言つてゐるのかさっぱりだ。この世界の住人たるミーニャとリーリエには通じていふらしく、ミーニャはリーリエを抱きしめて辛そうな顔でなにやら声をかけていた。

「やつべ、ミーニャが何を言つてゐるのかも分からなくなつちました」

「安心しろ。俺もだ」

「安心した」

早いな。

ミーニヤ、リーリエ、老人を見ながら、俺は疑問に思っていた。ミーニヤと老人の会話はまったく意味が分からぬのだが、不思議なことに、何故かリーリエの言葉だけは理解できたのだ。しかも、リーリエの言つことは全員が理解できていた。これは、おかしなことである。

ミーニヤはともかくだ、俺とトビが理解できる言葉を老人が理解できるわけがないのだ。

「なあ、ミーニヤ」

「ケコチロギリヒ。」

気持ち悪い、何言つてんだこいつ。

「あのや、俺とトビはこいつの世界の言葉が分からぬんだが」

「あ、セツでしたにゃ」

そう言つとミーニヤはちるつと舌を出した。かつわいいなあ。なんてことは思わない。純粹に殺してやるつかと殺意が芽生えた。

「萌えー」

トビは相変わらず気持ち悪い。

「少し待つていてくださいにゃ」

言つなり、彼女は何やら老人と一々言葉を交わす。老人は席を立つとタンスの中から小さな小瓶を取り出し、そして席に戻つて来た。

「精霊の霊だ……」

小瓶の中に入った虹色の丸薬を見て、リーリエがポソリとつぶやいた。小瓶をミーニヤが受け取り、中から一粒とり出すと俺とトビに差し出してくる。

「これは精霊の霊というもので、これを呑めばビのよつた言葉も理解できるようになる秘薬ですにゃ」

なに、その便利アイテム、理屈抜きっすか。貴方は未来からやつてきた猫型ダメ人間製造ロボットですね。ええ、分かりますとも分

かりますとも。

とか、どうでもいいことを思いつつそれを受け取り、まずはトビが呑むのを待つ。なんの警戒心もなく、トビが呑みこむ。トビの体に変化はない。

「じじい、何か食い物をくれ」

口の悪さはこの際ほおつておくとして、トビの言葉が通じたかどうかが問題だ。

「jdにぬづうづよ、lk kgg」

老人が何か言った。気持ち悪い。

「分かる……わかるぞ、オレにもこの世界の言葉がつ…」「

よし。いつも通りのあほうだ、呑んでも問題なさそうだな。俺も思い切って呑みこむ。

「……じいさん、俺の言葉が分かるか?」

「うむ。よう聞こえておる」

よしよし、これで言語に関する問題はクリアできたな。さっそく質問といいかね。

「なあ、じいさん。この街の領主ってのはばいにいるんだ?」

俺の言葉を聞くなり、老人はあからさまに渋い顔をした。それだけで、こここの領主が嫌われているということを感じた。

「領主館にあるが、ゲローブになんの用かね?」

「領主館ってのは、どんな建物だ?」

老人の質問を無視し、続ける。

「この街で一番大きく、立派で醜い建物じゃ。大通りの突き当たりに建つてある」

「わかった。精霊の雫といい、貴族の居場所を教えてくれた事といい、感謝するよ」

「もう行くのか、キキ」

「ああ。飯は現地調達だ」

「おつけ。楽しくなつてきた」

俺とトビは席を立つ。そして俺が玄関扉を開けようとしたとき、

老人に声をかけられた。

「まだ、質問の答えを訊いておらんが」
ゲローブになんの用かつて？ なに、たいした用事じやない。た
だの高校生がガキみたいに暴れるだけだ。要はさ、
「ムカつくから、ぶん殴つてくる」

そういうことなんだよな。

「ほほう。随分と分かりやすい理由じや、若いとは良いのう。して、
ミーーヤちゃんとリーリエちゃんはどうするのかね？」

老人は自慢のあごひげをゆつたりとじこきつつ、一人に問う。

老人の問いは酷な質問である。この世界でミーーヤは獣人族の街
道警備員であり、貴族との揉め事は人間族と獣人族の友好関係に係
わってくる。つまり、外交問題となり、最悪の場合は戦争になつて
しまうということだ。

それはリーリエにとつても同じだ。彼女は妖精族であり、妖精の
捕獲というゲローブの暴挙はオルタによつて食い止められ、内々に
て彼が処理をしたため、妖精族との外交問題には発展しなかつただ
けの話だ。

無論、長い月日を生きてきた老人はそれを理解している。そのう
えで、キキとトビをほおつておくのかと問うたのである。

「ミーーヤは……」

力なく垂れ下がった耳からは彼女の葛藤が窺える。
かとう うかが

キキの友人を想つ気持ちに胸を打たれ、彼女はこの街にキキとト
ビを案内してきた。けれども、今更ながら、それは間違いだったの
ではないかと思う。

貴族を相手にするということは、この世界で最大の勢力を相手に

するも同義である。ましてや、領主館は騎士団の一個小隊が警備をしており、たつた一人で勝てるような安い相手ではない。

その場の雰囲気に流され、自分はとんでもないことをしたのではないだろうか。どうして、もっと強く止めなかつたのだろう。これでは、一人を死地に連れてきたのも一緒ではないか。

「ミーーニャ、大丈夫？」

気が付けば、彼女を心配そうにリーリエが覗き込んでいた。

「あ、うん……リーリエちゃんは」

コンコンと、丁寧なノックが扉を鳴らした。

コン、さらにもう一度、ノックが鳴つた。

「ふむ」

突然の来訪者に対し、老人は扉を開け、その来訪者を迎える。中へと入ってきたのは、目深にフードを被つた長身の男だつた。

男には左腕がない。

「……これは、驚いたな」

男はミーーニャとリーリエを見るなり、数瞬固まつたあと、そう洩らした。

「久しぶりだね、ミーーニャ君。それと、我らが街の友人よ」

言つて男はフードを取る。

「オルタさん！？」

「オルタ！！」

ピーピーと笛の音が鳴り響く。

いやさ、俺としてはだ、気に食わないクソ貴族のクソ領主をフルボッコにしようと思っていたわけだ。お偉いさんの居る場所だから警備もいるだろうとは思つてた。でもさ、まさか本物の騎士が居る

とは思わなかつたんだよ。

恐れを知らないってのは凄いよな。

老人の言われた通りに領主館に来てみれば、鎧に身を包み、剣を持った二人の騎士が出入り口を護っていた。

一気に俺の熱は冷めたね。とはいっても貴族をござ
たい俺は、どうにかして中に入り込めないかと考えていた。

その矢先だよ

アカシ上等だよ。

気づいたら、トビが出入り口の騎士を行き成りぶん殴つてやがつた。で、ぶん殴られたほうはピーー笛を鳴らして侵入者を知らせ、もう一人はトビに持ち上げられている。

鎧を着た人をも上げるとか規格外すぎる

トビは持ち上げた騎士をもう一人の騎士にぶつけ、そんなことを

叫
さう

「相変わらずめちゃくちゃなヤツだな。結局、正面突破になつてし

またな……まあいい、せのことか」「

てのは慣れている。

それに、なんだかんだ言って、俺とトビでどうにかできなかつた

問題に無い

なんてことはない。いいつものことだ。

そう思い、無駄に広い領主館の敷地へと足を踏み入れた。

「先程の笛の音は……」

領主館で鳴らされた笛の音は街中に響き渡っていた。侵入者を知らせる甲高いそれは、建物の中に居るミーニャたちにも聞こえた。

「あの、若い連中じやな」

「アインデル翁^{おう}は、何が起こったのかご存じなのですか?」

オルタの問いかけに、アインデルと呼ばれた老人は小さくうなずいた。

「知つてあるよ。ただ、それは儂^{わし}ではなくミーニャちゃんに訊くが良かろ?」

「ミーニャ君にですか?」

オルタはミーニャに顔を向ける。彼の瞳に、肩を小刻みに震わす獸人族の少女が映った。

賽^{さい}は投げられてしまつた、もう、キキさんとトビさんは後戻りができなくなつてしまつたと、彼女は自分のせいだと震えていた。

二人を助けに行けたならどれほど楽になるだろうか。けれども、それは叶^{かな}わない。彼女は獸人族で、キキとトビは人間族だ。種族の壁が邪魔をする。彼ら二人を助けたばかりに、同族の仲間たちに迷惑をかけてしまつては本末転倒も良いところだ。

「……ミーニャ君。良ければ、何が起こっているのか訊かせてもらつてもいいかい?」

オルタはなるべく優しい口調を心がけ、今にも消えてしまいそうなミーニャに語りかけた。

「…………リーリエちゃんが領主様に酷い仕打ちを受けたって訊いて、ミーニャの恩人とお友達が怒つて……」

「まさか、それで殴り込みをかけたのかい？」

なんという無鉄砲な輩がいたものだと、オルタは驚きに目を見張つた。無鉄砲さもそうだが、なにより、貴族に向かっていく民がいるとは思わなかつたのだ。貴族に対する民の恐れは、元貴族だった彼がいちばん良く知つてゐるのだから。

「無理矢理にでも二人を止めるべきでしたにや、ミーニャのせいで二人は……」

死んでしまう。

「ミーニャのせいじゃない、リーリエが弱つちいせい。勇気を出して街のみんなに会つて来ていたら、キキヒトビは街にこなくて済んだ。だから、

「そなたちは勘違いをしておる」

唐突に、アインデルが口を挟んだ。

「儂が思うに、あの、若者たちは誰にも止められなんだと思つぞ」

「でも、ミーニャが街に連れてこなけば」

「ミーニャちやんが連れてこずとも、あの若者たちならば自力できただであらうよ。なにせ、『ムカつくから、ぶん殴つてくる』と、単純極まりない理由で動く輩じやからな」

そこまで言つと、アインデルは愉快気に笑つた。

「どこの元貴族と同じくらい清々しいやつらよの」「いやはや、まいったね」

オルタは苦笑し、続ける。

「ところでだ、一つ、面白く案があるのだが、聞いてみないかい？」

「館の中には入れるな、追えつ！」

「まずいまざいまざいつ、ひつじょうにまづい。

超人のトビとは違ひ、普通の人間たる俺は騎士たちとは戦わずにデッドオアライブの鬼ごっこをしていた。もちろん、鬼役は俺だ。目的はクソ貴族のクソ領主をぶん殴ることだから、取りあえず館のほうに向かっているのだが……出入り口から館までは無駄に距離があるため、たどり着く前に俺の体力が尽きそうだ。といつが尽きる。

「ああもう、どうさんすんの俺つー」

こんなわけのわからない世界で死にたかないし、死ぬつもりもない。かといって、鎧を纏い、剣を持ったやつらに挑みかかったところで勝てるわけもない。体力が底を付きつつあるため、逃げ切ることもできない。

押し付けよう。

思つが早く、俺はぐるりと半田を描くよう走って、未だ口付近で戦つてゐるだらうビデのまゝに向かひうことにした。

ギギ 背中轉されたー 紅倉膏持て
あい つは化け物かつ!

なんと、トビは相手にしていた全ての騎士を倒したらしく、俺に向かって歩いてきていた。頭だけじゃなく、強さも規格外過ぎる。あいつに任せればどうにかなるつ。

膝に手をつき、荒い呼吸を整えつゝ口にした。がしゃがしゃと鉄の擦れる音を背中で聞き、振り返る。

「なんだ、まだ倒してなかつたのか？」
　　「うかオレ、背中斬られ
たんだよ、見てくれ」

「見せんでいい」

何が嬉しいのか、斬られた背中を喜々とした表情で見せようとするトビを制し、俺は騎士たちに向きなおる。

どうやら騎士たちはトビを警戒しているようで、半包围の形をとりながら、じわりじわりとにじり寄つてきついた。

「キキ、後ろからも来たぞ。援軍だ、きっと」

おそらく、街に出ていた騎士たちが帰つてきたのだらう。これで囮まれたわけだ、俺とトビは。

「どうする、キキ？」

俺が訊きたいたての。本当ならばトビを焚^たき付けて力技で突破したいところだが、どうもそうはいかないようだ。

「オレ^が全部^{がまん}ぶつ飛ばしてやるつか？」

「やせ我慢^{がまん}をするな」

強がつてはいるが、トビは背中の痛みでまともに戦える状態じゃないはずだ。今は背中を向け合つてているから見えないが、さつき顔を合わせたときの顔は青白かった。斬られた背中の出血がひどいらしい。

「気にはんなよキキ。お前に拾^ひわれた命だからな、お前が行けつていやあ、オレは喜んで死んでやるよ」

「ふざけたことをぬかすな。クソ貴族のクソ領主をぶん殴つて、二人そろつてここを出るんだ。大丈夫だ、俺がどうにかする」

柄にもなくトビが真面目^{きめい}だから、何かスイッチが入つちまつたよ。腰^すを据えて覚悟を決め、この窮地^{きゅうぢ}を脱する方法を考える。

騎士たちが半包囮から完全な包囮態勢へとなりつつあった。

時間が無い。

何ができる、今の俺たちにできることはなんだ。
考える。

戦う以外にできる」とはなんだ。降伏はどつだ、上手くいけば牢屋送りで済むかもしれない。いや、それではダメだ。手負いのトビが牢屋でくたばるのが目に見えている。

そうだ

つ、

「者共、かれつっ！-！-！」

来るつ、やるしかないつ、、

「貴様ら、誰に剣を向けているのか分かつておるのかつ、いい加減にせよつづつ……！」

俺は腹の底から声を絞り出し、気迫を込めて喝破した。自分でも驚くほどの声量だ。おかげで騎士たちの足が止まつた。

「……誰だと？　ただの侵入者が偉そうに何を言つていい。かまわ」

「私は、キキ・キエイ。貴族であるぞつ」

隊長らしき人物の号令を遮り、俺は高らかに名乗りをあげた。これだけ暴れまわったあとだ、信じはしないだろつ。だが、よほどの馬鹿でない限り、簡単に仕掛けてはこないはずだ。

ここまで堂々と宣言されたら、もしかしてと、疑念を抱くのが人間の心理つてものだ。

「……嘘を言うな。そのような、みすぼらしい服装のものが貴族であるわけがない」

言い切りはしたが、かれとは号令を下さない。間違いなく、相手は疑念を抱いている。是ぜが非にでも俺が貴族だと信じさせてやる。そのうえで堂々とクソ貴族に合つてぶん殴つてやる。

「なんだと？　貴族たる私の言葉を信じられぬと申したか

仰々しい物言いで威圧感たっぷりに言つと、俺は隊長らしき者に向かつて一步を踏み出した。

「ち、近づくなつ。我々オルベル騎士部隊が田舎ものだからって、舐めるなよ。貴族か、そうでないかぐらいの判別はつく」

口調の割には焦つてゐる。内心、違つたらどうしようかと冷や冷やしているんだろう。

「よいか、しばし待つておれ」

そう言つて俺はポケットから皮の財布を取り出し、小銭入れを開く。そこから、なるべく綺麗な五百円玉をみ繕つた。もちろん、新硬貨のほうだ。

「見よ」

一言だけ口にして、俺は金色に輝く五百円玉を高々と掲げる。

「！！ さ、金だつ！」

誰かの一言を皮切りに、騎士たちが騒ぎ出す。「は、初めて見た「王都で公開されていた金よりも大きいぞ」「なんて綺麗なんだ……」

…

まあ、実際は金ではなく、銅が主成分の二ヶル黄銅製の硬貨なんだが、予想通りの反応を示してくれて安心したよ。

「これでも貴様らは私が貴族かどうか疑うかつ」

「！！ も、申し訳ありませんでした。金を持ち歩かれているよう

なお方が、貴族ではないはずがありません！」

一斉にしゃがみこみ、頭を垂れて忠誠のポーズをとる騎士たち。

「つむ。分かればよろしい」

上手くいって良かつた。ワンコインで命を護つたよ、これから俺

は五百円玉に頭が上がらないだろ……

「だま 騞されるでないっ……！」

どこぞから大声が轟いた。その場の全員が半ば反射で声の方に顔を向ける。

「そやつは貴族などではない！」

視線の先、醜悪きわまりないデブが、一人の兵士を連れて館からこちらへと向かってきていた。

音楽家モーツアルトのような髪型、子供くさい赤のマント、指には宝石と思われる指輪をはめ、たゆんたゆんと揺れるお腹。絵に描いたような貴族像だ。ああ、間違いないね。

クソ貴族のクソ領主様だ。

自分から殴られにくるとは殊勝な心がけじやあないか。今すぐ殴り逃げしたいところだが、今のトビに無理はさせたくないの、ここは落ち着いていく。

「私を知らないとは困ったものだ」

「笑わない。キエイ、などという苗字は聞いたこともない。さ

きほど出していた金とて、盗んだ物ではないのか？」

俺の前までやつてくると汚い声を発するクソ貴族。

「失礼極まりない男だな。本当に私を知らないとは、じつやう呆けてこらつしやるよつだ」

「口の減らないやつだ。ならば訊くが、お前の役職はなんだ、階級はなんだ、このような田舎町になんのようだ？」

おつと、これはマズイ。さすがにどれも答えられない、本物の貴族を相手に適当なことは通じないだろつしな。

「どうした、ほら、答えてみよ。ん？」

「うわ、ほんと殺したいはこいつ。

「キキ」

と、今まで大人しくしていたトビが口を開いた。かなりまいつているらしく、声に力がない。

「お前は黙つてろ。体力を使うな」

「ミーニャとリーリ工が来た」

「なに？」

言われて俺は振り返る。

「おいおい、どういうことだこれは。一戦やらかす気か？」

俺の目が捉えたのは、斧や鎌、木の盾などで武装した一団だった。中には女子供が混じつており、ミーニャとリーリ工の姿もみつけられる。

「これは何事だつ、貴様ら平民風情がこゝに足を踏み入れて良いと思つておるのかつ！」

「変わらない醜さだね、ゲローブ」

武装集団のリーダーと思わしき男が口にする。透き通つた落ち着いた声だ。

年齢は三十手前くらいだらう。むりむりの金髪で、男には片腕がない。

「貴様……オルタか！……反逆者め、ワシと戦つつもりかつ」

「別に戦つてもいいのだけれど、今日は話をしにきたんだ」

「貴様ら汚物と話す舌など、もた」

「勘違いをしないでくれ、話があるのは君じやない。マーロン・ハルス公爵の代理で来られた、キキ・キエイ男爵にだ」「なに……？」

クソ貴族が俺を見る。その眼差しには若干の驚きと猜疑^{さいけい}が含まれていた。

「というかだ、確かに男爵は貴族に含まれなかつたと思つが……まあ、世界が違うんだ、色々と差異^{ちゆう}があつて当然か。

何がなんだかわからんが、これは俺を貴族だと信じさせるチャンスだ。男に話を合わせることにする。

「久しいな、オルタ？」

そんな名前で呼ばれてたよな、確か。

「覚えてくれてたとは嬉しいよ、キキ。おっと、これはすまない。今私は平民だから様を受けたほうが良かつたかな？」

清々しいくらいにわざとらしい口調だな。この言い方からすると、オルタという男は元は貴族だつたらしい。

「よしてくれ、私が敬称^{けいじゆう}を嫌つているのを知つているだろ」

「はは、分かつていい、冗談^{じうだん}さ。君と私の仲だからね」

元同僚の仲良しつて設定なわけね。それにしてもわざとらしい。もう少し自然な演技ができるのかこいつは。

「まさか、本当に貴族だつたとはな。それも、マーロンの使いとは

……

小声でクソ貴族がつぶやいた。どうやら完全に信じたらしく。

さて、貴族という立場を利用し、後はどうやってぶん殴る理由をつくるかだな。できればクソ貴族を領主の任から外し、権力と財力を奪つてしまいたいところだ。そうすれば、もう、リーリエにちょつかいをだすこともなくなるだろう。

「ところでキキ。マーロン公のお耳に入れたい話があるんだ」「なんだ？」

「……実はね。外交問題に発展してはいけないと思って、街の者に

口止めをしていたことがあるんだ」「

「！！ オルタ、貴様っ！ お前ら何をしておるか、平民どもを敷

地から叩きだせっ」

激高げつこうし、騎士きしたちに怒声のうせいを飛ばすクソ貴族きしやく。騎士たちが慌てた様

子で動き出し、オルタ率りついる集団も咄嗟とつさに武器を構えた。

ここまで話し合ってきたのに、いまさら血を流すのはナンセ

ンスだろうがつ、やせるかつ。

「双方そうほう、剣を收めよつ！！！」

俺は本日一度田となる喝破おさをする。両方の動きが止まることを願う。

「落ち着くんだつ！」

続いてオルタが喝破し、オルタ側は動きを止めた。

「止まるでない、行けつ、平民どもを切り捨てよつ……！」

一度は怯んで動きを止めたものの、騎士たちはクソ貴族の叱咤で

再度、剣に力を込める。

無理か、止まらないかつ。

「キキの言葉に反するはマーロン公に反するも同義ぞ……！」

今度は騎士に向けられたオルタの喝破、ピタリと、騎士たちが動きを止めた。

なるほど、クソ貴族よりもマーロンって人のほうが位くわいが上なわけか。

「オルタの言う通りである、私の言葉はマーロン公の言葉と思えつ。お前もだ、良いなつ」

オルタにすかさず追従つこじゅうし、さらには騎士たちだけでなく、クソ貴族にも言い含めておく。

「う、ぬ……」

ひしゃげた声で呻うめく、クソ貴族。

少し冷やつとしたが、これはいい具合に展開が転んだものだ。いま、この瞬間、俺の立場はこの場にいる誰よりも上になつたのだ。とはいえ、強制力には欠けるが。

「……オルタ。街の者に口止めをした話とは、どのような話なのだ？」

場が静かになつたのを見計らい、わきほど中断された話の続きを促す。

「その話をする前に、まずは見て欲しい子がいるんだ。リーリエ、さあ、こちらへ！」

「リ、リーリエか……？」

突然の指名にリーリエはびくりと反応し、怯えた様子でミーラヤの後ろに隠れてしまった。

「オルタ、なんだか、怖いぞ……」

空気の読めないやつだな、いや、今の状況を理解できていないのか。

「キキ、彼女は見ての通り、、、妖精族だ」

うん、知ってる。知つてはいるが、リーリエが自分のことを珍しいと言つていたので、知らない風を装つてオサレに驚いておくことにする。

「なん……だと……？」

「そこにいるゲローブはね、他種族である妖精族の彼女を物のようにあつかい、さらには手をあげた。キキなら、これがどういう意味か分かるね？」

ようは、ゲローブのしたことが妖精族に知られたら種族間で戦争が起こると言つているわけだ。

「なるほど。妖精族と人間族の戦争を回避するため、オルタは街の者に口止めをしたわけか」

「そういうことだよ」

「と、言つておるが、実際はどうなのだ。クソ……ではない、ゲローブ」

「そのようなこと、嘘に決まつておるつ。証拠はあるのか、、オルタ！」

頭の悪い悪人つてのはすぐに証拠を出せだの見せてみるといふ。まったく、なつてないな、ここは俺が賢い悪人つてのをみせてやろうか。

「ゲローブよ。証拠などはどうでも良いではないか

「それは、どういう意味だ」

「証拠というものは作るもの、と言つてはいるのだよ」「金と権力にものを言わせ、捏造するつもりか、貴様」

みるみるうちにゲローブの顔が赤くなつていく。すんごい怒つて

らつしやるよ。赤いカエルみたいだ。

「落ち着きたまえ。いいか、その逆も可能だとこいつを忘れてはいかんよ？」

「俺に金を積めば、証拠があつたとしても無かつたことにしてやる。そり言つているわけだ。

「は……そうか、そういうことか」

俺の意図を理解したゲローブに笑みがこぼれだす。一言でこいつ、気持ち悪いと。

「いくらだ、いくらだせばいい？」

「今回は金以外のものにしようか。そうだな、領主館ではどうだ？」「領主館だと？ つまり、オルベール領主の座をよこせとこいつとか？」

「理解が早くて助かるね」

「いいだろう。このような辺境の地などくれてやるわ。もとより王都に戻りたかったのだ、ワシは」

言つなり、ゲローブは懐から丸められた紙を取り出した。

「オルベール領主の認可状だ、受け取れ

「ああ、すまないな。しかし、手続きなどは必要ないのか？」

本来、こういった引き継ぎには面倒な手続きが必要で、正式な許可がないとダメだと思うんだが。

「その妖精がオルベールから逃げてからとこいつもの、ここは寂れてしまい、既に王都から見離されてられておる。統治しているものが変わったとて気にせんよ、王都は」

金にならないからどうでもいい、といふことか。

俺たちの世界で例えるならば、この街は経済が破綻したので国が見捨てた、ということだ。

「ふむ。つまり、認可状を持つものが統治していれば文句を言わないわけだ」

「そうだ。王都に干渉はされぬ、そのかわり、援助もしてもらえぬがな。では、約束通り妖精の件は黙つてもらうぞ」

「ああ、分かつた。それよりゲローブ」

「なんだ、まだ、何かよこせと言つのではあるまいな？」

言わないっての。

だつて、お前にはもう、何もないんだから。

「早く敷地内から出て行け」

「分かつてある。荷物をまとめたらすぐに出でていふつもりだ

「どこに行くんだ、出口は向こうだぞ？」

館に向かおうとするゲローブに向かつて俺は言い放つてやつた。ゲローブは、どうこうことだと聞いたげに俺を不思議そうに見つめている。

「……そうか、そういうことだったのか。キキはとんでもない詐欺師だな。お金に目くわんが眩くらんでしまったのかと、少しばかりあせつてしまつたよ」

静かに事の成り行きを見守っていたオルタだが、俺の目的に気がついたらしく、声をあげて笑い出した。彼以外はいまだに気が付いておらず、一様にぽかんとしている。

「おめでたい頭だな、クソ貴族。お前にはまとめる荷物なんて有りはしないんだよ」

口調を変えておく必要もなくなり、俺は元の口調へと戻して言つ。「急に話し方を変え、貴様は何を言つておる。館にはワシのコレクションや財産、荷物が置いてある」

「あほうなことをぬかすな。領主館内の敷地にあるものは全て俺のものだろうが」

「あほうなことを言つておるのは……まさか……ワシを、はめたのか？」

いまさら氣づいたのか、あほうが。賢い悪人つてのはな、合法な手段で相手に反撃を許さないくらいに痛めつけ、すべてを奪い取るんだよ。

認可状を持つ領主たる俺が、領主の持ち物たる館に入るなど言えば、たとえゲローブですら入ることは許されない。

「貴様つ、いくら街の領主だとはいえ、好き勝手できるわけではないぞ！ 王都にて貴様を査問会議せもんかいぎにかけてくれるわつ」
わかつてないな。認可状を持つている、領主だといひことば、こんなこともできるわけだ。

「騎士隊に命令する。そいつを捕えて牢屋らうやに放り込め」

「し、しかし、相手は貴族のゲローブ様です、そのようなことは

難色なんじゆくをしめす騎士たち。けれども、渋るのは予想通りだ。

「何を言っている、ゲローブなどといつ貴族は聞いたことがない。そいつはただの侵入者だぞ」

「き、貴様……！！！」

「お前らは領主たる俺の言ひことが聞けないのか？ 命令違反で首を跳ね飛ばされたいのか？」

「い、いえっ」

「なら、早く侵入者を拘束こうそくして牢屋に放り込め」

「はっ」

命令に従つて騎士たちが一斉に動き出す。そして、ゲローブの両腕を掴むとずるずると引きずつて行く。

「は、離せ、離さぬかっ」

わめき散らすゲローブを見つつ、俺は、一つ忘れていたことを思い出した。

「待て、止まれ」

騎士たちを呼び止めると俺はゲローブに近づく。

「歯を食くい縛れ」

まあ、食い縛る時間なんてやらないが。

全身全靈の力を込め、俺は、醜惡しょあくな性格をあらわしたゲローブの顔面へと、拳を叩き込む。

そして言つてやる、なに、たいしたことじやない。
所詮は子供の戯言たわいごん。ただの感情の押しつけ。

「ムカつくんだよ、お前

立派なことなんぞ、俺には言えないんだよ。
俺はまだまだ子供で、高校生なんだから。

「連れてけ」

「は、」

俺の命令を素直に聞き、騎士たちはびくびくと痙攣けいれんしている。ゲローブを牢屋へと連れて行く。いや、牢屋とかどこにあるのか知らないけど。

「キキ君」

殴つて痛む手をさすつていると、オルタが俺に声をかけてきた。

ミーーニヤも一緒にだ。しかし、まずは話よりもトビが先だ。

「悪いんだが、話は後にしてくれ。怪我人がいるんだ」

「トビさんなら、すでに街の人たちが医術所に運んで行きましたにや」

「そうか、対応が早くて助かる。リーリエは？」

「リーリエちゃんはトビさんに着いていましたにや」

大丈夫か大丈夫か、と涙目で付き添うリーリエの姿が浮かぶ。あいつのことだ、まあ、死ぬことはあるまいて。

「キキ君、改めて自己紹介をしたいんだけど、いいかい？」

「ああ、頼む」

「私はオルタ、この街、オルベールの元領主にして元貴族だった者だ」

「喜衛嬉々、呼び方はさつきみたいにキキで頼む」

言つて俺は手を差し出した。はたして、この世界には握手という概念はあるのかね。

「わかった、キキ」

オルタは片方しかない手で、がつちりと握手を交わした。握手つ

てのは、世界共通なのだろうか。

「君とトビ君のことは領主館に来るまでの道中で少しだけ聞かせてもらったよ。なんでも、異世界から來たらしいね」

「ん、まあな。って信じるのか?」「

自分で言つのもなんだが、うそをつくことにはつえない。と思

うんだがな。

「信じるさ。危険をかえりみず、友人のために無茶をするような君だからね」

きらりとオルタの歯が光る。なんといつさわやかスマイルだ、さぞ、モテることだろ?。

「しかしだ、随分と綱渡りだつたね。あまり関心ができるやり方じやがないね」

「そうですにやつ、凄い心配したんですにやー。」

「悪い悪い。で、お前らはどのあたりから見てたんだ?」

ミーニャには適当に謝つておき、俺は気になつていてことを訊いた。

俺がゲローブに役職や階位を聞かれ、答えられずピンチにおちいつたところでオルタたちがやつてきた、しかも、窮地きゅうじを脱する見事な合の手をたずさえてだ。これを、偶然という一言でかたづけてしまうのはこたさか無理があるといつものだ。

間違いなくどこかで状況を見ていた、と考えるのが妥当だとうだろ?。

「君が、貴族だと名乗つたあたりからだよ。それまでは仲間を集め歩いてね」

「なるほど。領主館で俺とトビが騒さわぎを起こしたことにより、街に出ていた騎士の一派が引き上げて監視が緩まつたところを見計らい、一ヵ所に合流したわけか」

「じゃないと、これだけの武装集団が集まることはできなはずだからな。」

「正解だ。本当はすぐにでも敷地内に乗り込んで行くつもりだつたけれど、なにやら君が面白面白いことを言つっていたのでね。機会を窺つてから乗り込んでいったんだ。その結果、誰も死なずに済んだので最良の機会で乗り始めたと思つていいのよ」

「結果だけ見ればな」

「その結果が重要なんじゃないか。それにしても、君の状況把握と機転の良さには舌を巻いたよ」

オルタの言葉を訊いた街の人々が、「貴族を相手に度胸があるよ」「金と街を奪うだなんてたいしたもんだ」「スカッとしたよ!」「などと口々に言い出した。貴族、というよりは、ゲローブの嫌われぶりがよく分かる。

褒められて悪い気はしないが、こう、背中がかゆくなる。
「これからキキはどうするんだい? オルベールの領主として、私たちを導いてくれるのかい?」

ピタリと、街の者達が黙つて静かになつた。彼らの期待に満ちた眼差しが俺に注がれる。

まあ、答えは決まつていいよな。

「やるわけないだろうが、あほづ。これはお前にやるよ」

言つて認可状をオルタに手渡した。

「……そうか。残念だ」

「言つまでもないが、目立つた政策をとらなければ王都に目をつけられる」ともないだろうから、元貴族のあんたが統治をしていても問題はないはずだ。ゲローブの処遇だが、それもあんたに任せる「そうだね。でも、私で良いのだろうか?」

「それを訊くのは俺じゃないだろ」

「あごをしゃくり、オルタの後ろを差す。

オルタは振り返つて街の住人を見回したあと、ゆっくりと口を開いた。

「私が不甲斐ないせいでゲローブなどという下賤な輩に街を奪われ、重い税を課せられ、皆を苦しめてしまった。もう一度、皆がチャンスをくれるなら、私は、オルベールの領主となつて、ともに歩んでいきたい。どう、だろうか?」

しばしの静寂のあと、歓喜の声が響き渡つた。

空気が震える。喜びだけが満ち溢れている。

ずっとこの時を待つていたのだろう、オルベールの住人達は。

貴族に街を見捨てられ、虐げられ、ゲローブの課した重税に苦し
み、それでも彼らは希望を失わずに生きてこれた。それは、オルタ
が居たからだ。いつかゲローブを追い出し、また、オルタが街を治
めるこの日を、ずっと待ち望んでいたのだろう。

鳴り止まぬ歓喜の声を聞きつつ、俺は一人そう思つてゐた。と、

「キキさん」

ミーニャが声をかけてきた。

「どうした。お前も街のやつらに混じつて叫んできたらどうだ？」

「キキさんは混じらないのですかにゃ？」

「俺は関係ないだろ。この街の住人でもなければ、この世界の人間
ですらないんだ」

「でも、こうして皆さんが喜べるのはキキさんのおかげですにゃ」「
否定はしない。けれども、俺が貴族に喧嘩けんかを吹っかけたのは街の
住人のためじゃない、オルタが領主になつたからといって、別に嬉
しくもなんともない」

「リーリエちゃんが悲しんでいたから、ですにゃ」

分かつていますよ、と言いたげに隣りでにっこりとミーニャは笑
う。

なんか腹が立つな、ちくしょうが。

「結局は、俺がムカついたから。つてのが正解なんだがな
それが本音だ。」

リーリエとは友達になつて間がないとはいゝ、なつちまつた以上、
苦しんでいるのなら手を差し伸べ、泣いているならその訳を訊ぐの
が当然だ。友達が珍しいという理由だけで物扱いされたなら、腹の
一つや二つも立つつてものだろつ。

もしかしたら……俺はトビ以上に単純なかも知れないな。

「もしも、」

少しばかり自分の短絡的思考たんらくてきじこいに呆れていると、なにやらミーニャが聞きたそうにしていた。

「もしも、なんだ？」

「うつむき、恥ずかしそうにしてこる//ニーナ。なんだ、また優しくしてくださいとか気持ちの悪いことをぬかすんじゃなかろうな、こいつは。

「もしも、もしも……//ニーナがピンチになつたら、白馬に乗つて助けにきてくられますかにゃ？」

行くかボケえ、どんだけメルヘンなんだよこいつ。助けに行くんなら戦車に乗つていくわッ、なんなら白く塗ぬつてから行つてやるよつ。

「白馬は無理だ。でも、ま、トビと一緒に助けに行く可能性はゼロではない」「

「そこは100%助けに来てくださいよ」
何が「よう」だ。気持ち悪い、ぶりっ子が。殺意の波動が目覚めるだらうが、あほう。

こじけてしまつたミーニャを他所先に、いつの間にか、「祭りをするぞ」と騒ぎ出している街の住人に目を向ける。

俺とトビがこれからどうするか、どうやつたら元の世界に帰れるのか、考えることは多々ある。あるが、取りあえず、それは祭りが終わつた後に考えることとする。

楽しめるときに樂しむ。

これ、学生の常識な。

2 - (1) あほう + ハヤ + 妖精 = キキのストレス

異世界にきて記念すべき一回田の朝は、オルベール領主館の客室で迎えた。

そして、俺はベッドできのうのことを思い出して頭を抱えたくなつた。

きのう、オルタが領主に就任したという報せは電光石火の速さで街の住人すべてに伝わり、急きよ、街をあげた祭りが行われた。通りにはいくつものテーブルが並べられ、その上には数々の料理や酒といったものが置かれ、一時間も掛からぬうちに人々はバカ騒ぎを始めた。

最初は良かつたんだ。この世界の楽器で奏でられる陽気な音楽を聞きながら、俺はミーニャと一緒に異世界の飯に舌鼓したづつみをうつついて、ゆつたりと祭りを楽しんでいた。

街の人たちは積極的に話しかけてくれて、色々な話を聞かせてもらつたし、俺の世界の話も色々とした。キキ様、なんて同じ年の女の子に様づけで呼ばれて恥ずかしかつたりもしたが、まあ、悪い気分ではなかつた。良く分からんが、なぜかミーニャはムツとしていた。

ああ、楽しかつたよ。あほうとリーリエが乱入してくるまではな。

俺が街の女の子と雑談に興じているとだ、どこからか、「誰かその人を捕まえてくれ!」なんて叫びが声が聞こえてきた。見てみると、上半身裸で包帯を巻いたあほうがリーリエを肩車しながら、こちらへと向かつて来ていた。

「祭りだつていうのに寝てられるかつ、バカめ!」

「バカはお前だ。怪我人は大人しくしきつての。

「リーリエを仲間外れにするなんてズルいぞ!」

いや、お前は怪我人じゃないじゃないんだから普通に参加しろよ。

余計なもん連れてくるなよ。

「キキはどこだつ、キキを出せー！」

「トビー！ あそこにいるぞ、ミーニヤも一緒にだー！」

隠れていれば良かつた。後悔先に立たずつてか。

「キキいいいい！」

叫びながら突進だ、文字通り突進な。俺の隣りで話していた女の子が見事テーブルにダイブだよ。

「ナイスですにやつ」

吹き飛んだ女の子を見て、グッドボーーズを決めてミーニヤがそんなことを言つていた。意外とひどいやつである。

「キキ、どうして祭りのことを言わなかつたんだ」

「急ぎよ行われた祭りだし、なにより、お前は治療中だろ？ が

「リーリエは治療中ではござ、リーリエには声をかけてほしかつたぞ！」

俺は保護者じゃないつての。いぢいぢ伝えに行くかよ。

「や、やつと追いついた」

トビを追いかけてきたのだろう。俺たちのところは中年のおっさんがあつてきて、乱れた息を整えている。

「出たな、医者やう！」

「医者？ 僕は医術師だよ。それより、早く院に戻つて安静にしていてくれ。出血は止まつたけど、君は血が足りないから動き回れる状態じゃないんだ」

「馬鹿めつ、オレに血など必要ないわー！」

「いや必要だよ！」

「ひるせえ！」

正論いつたのに殴^{なぐ}られるとか、おっさん可哀そう過^{すぎ}る。さりとて

周りで飲み食いをしていた者に大爆笑されていた。俺は同情するよ、おっさん。

「オレ、祭りに参加してもいいよな、な？ キキ？」

「別にかまわんが、走つたり暴れたりはするなよ？」

「任せろー。」

返事だけは良いんだよな……

もちろん、トビが自重するわけもなく、騒ぎまくっていた。飲むわ食つわ歌うわ踊るわ、物は壊すわ人わ投げるわと、騒ぎまくるまくる。あげくの果てに、やはり血が足りなかつたらしく、気絶して医術院とやらに運ばれていった。盛り上がりはしたが、トビの被害にあつた者は多い。まあ、祭りでの出来事だ。誰も怒つてはいなかつたが。

今日は、トビの様子見がてらに医術院とやらに行って、トビに殴られたおっさんには謝つておくことにする。

俺はそつ思い、寝心地の悪いベッドから出た。

「キキ、朝ご飯だ！」

あてがわれた密室を出ると、とたとたと長い廊下を走つてきたりー理工に声をかけられた。まるで、俺が朝飯のような言い方だ。

「やうか、どこに行けばえる？」

「リーリエが案内する

「頼む」

領主館で一夜を過ごしたとはい、まだ俺は館内のことを探していない。きのう、オルタに密室をあてがわれたあと、俺は見て回る体力がなくてすぐに寝てしまったからだ。

「キキ、迷子になるかもしけないから手をつなげ」
「断る」

「！？」

手をつなぐ理由が分からん。リーリエが先導をしてくれたら事足りるし、わざわざ手をつなぐ必要がない。

「迷子になつてもいいのか？」

「そもそも、迷子にならない」

「……手をつないだら、リーリエともつと仲良くなれるのになあ」ときおり上目使いでチラチラと俺を見てくるリーリエ。そんなア

ピールいらぬいから。

「ああそつ。それよりも早く案内してくれよ」

「……」

「……」

無言で見つめ合つ俺たち。

「嫌だつ！…」

なにつ！？

言つなり走り去つて行くリーリエ。これだから子供つてやつはつ。俺はリーリエを追いかける。見失うと朝食にありつけなくなる。何せ、館はけつこうな広さなのだ。

走ること数分、リーリエはどこぞの部屋に飛び込んでいった。俺もすかさず部屋の中へと入つて行く。

「おや、キキ君。良い朝だね」

中ではオルタが書類を片手に、優雅^{ゆうが}に食事をとつていた。

十メートルくらいだろうか、の長さのテーブルには純白のクロスが掛けられており、その上には朝食とおぼしき物が乗つている。西洋貴族の食堂、といったところだらう。

「あまり良いとは言えないな」

ふわふわの寝具^{しんぐ}に慣れている俺は、ここのらの世界の寝具は堅^{かた}かつた。さらには、起きて早々に追いかけつゝをさせられたのだ、これで良い朝とは言えない。

オルタの対面に座る。

「ミーニヤあ、キキが、キキがあー！」

「照れていただけだからね、ほら、リーリエちゃんも朝^あはん食べよひにや？」

リーリエはエプロン姿のミーニヤに抱き着いており、ミーニヤは困った表情で慰めの言葉をかけていた。

「キキ。今日の予定は決まつていいかい？」

ミーニヤたちを見ているとオルタが話しかけてきた。田は書類に向けたままだ。

「とりあえず、医術院とやらでアーティの様子を見に行つもつだ。できれば、お前に案内して欲しいと思つてる」

俺は田の前に置かれていた朝食に手を付ける。まずは飲み物をすすつた。

「すまない。領主に戻つて初めての田だからね、やることが多くて付き合うのは無理そうだ」

「そうか。なら仕方がない」

「良ければミーニャが案内します」

「リーリエも案内するぞ！」

一人は席に着きつつ、案内役を買って出してくれた。正直いつて遠慮したいが、背に腹は代えられない。

「わかった、頼む」

「はいですにゃ」

「うむ！」

笑顔でうなづく一人。はつきり言つて不安だ。なごよつ、うるさくなりそうで嫌なんだよな。

「トジ君に合つたあとは、街で買い物をしてくるところだよ

「お金は持たせてくれるのか？」

「無論だとも。買い物をしたあとは、アインデル翁に会つてくれるといい」

「誰だ、それは」

「きのう、妖精の霊をゆずつて下さったおじいさんですか？」

「言われて思い出す。あの、髭の長い老人かと」

「アインデル翁はなかなかに博識なお方でね、もしかしたら、元の世界に帰る方法を知つているかもしれないよ」

さすがはオルタだ、俺の求めていることを良く分かつている。内心で感謝しつつ、俺はさつと食事を済ませることとした。

オルベールの街は賑^{にぎ}やかとはいえない。けれども、街を行き交う人々には笑顔が見て取れるし、どこか、楽しそうである。これも、オルタが領主になつたおかげなのだろう。

今日は天氣にも恵まれ、オルベールの大通りには多くの市が立つていた。辺境の地とはいえ、街には人が多いらしい。

「貴い物はあとまでは上ビの居る医術院に行くで話だした」

てへ、なんて自分の頭を「ずく///」一いや。ぶち殺したくなつたのはいつまでもない。

医術院とやらは大通りの中央辺りに建つてあり、そして歩く」と
もな、着ハ二。今は医術院の前二階らつナガビ

! ! !

あほうのわめき声が聞こえる。意味が分からん。いつたい、中で
は何が起こっているのやう。

「正義のための政治小説」

苦しみでいぬひつが、樂しんでいぬ坂がある。

「あ、リーリーちゃん、待つてほしいよ！」

リーリエを追いかけて中へと入る//——ニヤ。あまり氣は進まないが、

中では、それは面白い光景が広がっていた。

「ああもう、こんな元気な怪我人は初めてだよ！ そもそも、怪我人なのか!?」

「落ち着いてください先生っ！ 彼は間違いなく怪我人です！！」

「トビいい！」

「リーリエ！ 助けてくれ、このままだとオレはカツコイイ改造人間にされてしまう！！」

かっこくなるんならしてもらえよ。

「かいぞうにんげん？」

「ミーニヤに聞かれても困るこや……」

「何をしてんだ、お前は。そういうプレイか？」

「ミーニヤ、キキ！ 助け」

「少し黙つてる」

「はい」

言われた通りに黙すトビ。おそらく、じつとしないからだと思つ

が、トビは何本もの鎖で診療台に縛りつけられていた。

「ああ良かつた、君たちが来てくれて助かつたよ。包帯を変えようとしたら、『改造する気が』ってわけの分からぬことを言い出して暴れるから困つていたんだ」

ご愁傷様。トビがわけの分からないことを言つのはいつものことなので、俺はさして驚きはしないし疑問にも思わない。むしろ、トビを押さえつけたおっさんに驚くよ。

「トビ、大人しく包帯を変えてしまえ」

「良かるう」

何を偉そうに。最初からそうしつけよ。

「キキ、かいぞうにんげんってなんだ？」

くいくいと服の裾^{すそ}を引っ張り、どうでもいい」とを訊いてくるリエ。というか、そのまんまだから説明に困る。

「ああえど、あれだ、カツコイイ人間のことだ」

説明が面倒なので適当に。

「なんと… カツコイイ人間のことが、ならばキキとトビはすでに

かいぞう人間だなっ」

「トビはそうだな。俺は違うが」

「残念ながら、俺はトビのように整った顔はしておらず、『ぐぐぐ』^{平凡なルックスだ。}生まれてこの方、彼女はおろか告白すらされたことがない。」

トビの場合はモテるのだが。いかんせん、トビの性格を知ると女の子は霧散するように離れていく。そのため、トビも年齢イコール彼女なしである。残念な男前だよ、本当に。

「キキさんはカツコイイですにゃ！」

急に大声をあげたミーニャ。少し、驚いてしまった。

「……なんだ、いきなり」

「あ、いえ、あはは……『冗談ですにゃ』

顔を赤らめ、照れ笑いを浮かべながら、そんなことをいつ//一一ヤ。

「というかだ、『冗談つてひどくないか？ カツコイイが『冗談』ということはだ、俺はカツコイイ』ことになる。遠回りにけなされた気分だ、ちくしょうめ。」

「よし、これで終わりだ」

「おお、ありがとな」

包帯を変えるのが終わつたらしい。トビは上着を着ている途中でおっさんは包帯を箱になおしている。俺はそんなおっさんに話かける。

「トビの具合はどうなんだ？」

「傷は問題ないよ、完全に塞がつて^{ふさ}いるからね。ただ、医術では失つた血液までは再生できないから、自然に回復するまで激しい運動^{ひが}を控えてほしい」

「前から疑問に思つていたんだが、医術つてのは魔法のことか？」

「妙なことを訊くだんね。ああいや、そういえば君とトビ君は異世界から来たんだつたね。もしかして、君たちの世界には魔術や魔法は存在しないのかい？」

「言葉は存在するけど実際に使える人はいない」

「それは不便な世の中だね。『医術』というのは、魔術や魔法でおこなう治療のことをいい、また、医術を行使できる術者のことを『医術師』と呼ぶんだ」

医療の変わりに医術、医者の変わりに医術師、といったところか。「世界が変われば色々と違つてくるものだな。ありがとな」「礼には及ばないさ。それよりもトビ君のことだが、後は自宅療養じたくりょうようで大丈夫だよ」

「わかった、このまま連れて帰る。治療代はいくらだ?」

「今回はタダでいいよ。僕は商人じゃないからね、街の英雄からお金を見るほど無粋ぶすいじゃない」

英雄うんぬんは横におくとして。無駄にかつこいい、このおっさん。医は仁術じんじゆというが、まさしくこいつことだらう。

「それはありがたい。感謝する」

「なに、気にしないでくれたまえ」

「キキ、これからどうか行くのか?」「

着替え終わつたトビが、どこかへ行きたいと言わんばかりに口を開いた。縛られていた肌の部分が赤くなつていて。

「ああ、買い物に行く。その後はきのう会つた老人に会いにいく」「おつけおつけ。買い物って何を買うんだ? エロゲか?」

「そんな物は買わん、そもそも売つてると思えん。おもに服だ」「マジかよ、エロゲ買わないのか。どうかしてるぜ」

どうかしてるのはお前の頭だ、桃色ブレインが。

「あ、武器は買わないのか?」

「武器か……」

「モンスター出るし、買つとこつぜ」

そういえばそうだつた、この世界は日本のよつて平和で安全という訳ではなかつたな。使いこなせるかは別として、護身用いじゅぎように持つていたほうがいいのかもしれない。

「そうだな、武器も買つておこづ。そろそろ行くぞ、トビ」

「おう、オレはハンマーを買つた
「ならなら、リーリエは『がいいぞ』
「ミーニャは魔術補助の杖かにやあ
いや、買つのは俺とトビの分なんだが……とは、盛り上がりでい
るために言はずらい。まあ、オルタが持たせてくれたお金は結構な
額なので、ミーニャとリーリエの分も買ってやることにする。
「じゃあおっさん、俺たちはそろそろ行く。世話になつた、またな
「ああ、またね」

そうして、俺たちは医術院を後にした。

俺たちは今、服屋に来ている。街でも人気の服屋らしく、店内にはぼつぼつと客が見て取れた。

平民向けの服屋なので、お値段はどれもリーズナブル、「らしい」らしい、というのは、俺はこの世界の文字や数字が読めないからだ。妖精の霊では言葉を理解できても、文字や数字までは読めないらしい。

この世界の服は想像と違つて意外と充実していた。使われている素材こそは少ないが、それでも意匠をこらしたものが多く、また、種類も豊富だ。

「さすがに漢字が印刷されたものは無いか」

俺は服装にはこだわらない。現に今も、『夏』とだけプリントされたTシャツとチームのズボンといつシンプルな服装だ。服に金を使うなら、音楽CDや本に金を使う。

「キキさん、これ、似合いますかにゃ？」

物珍しさから服を見て回つていたら、赤を基調にした服を身体に当たたミーニャに声をかけられた。耳がぴこぴこと動いており、どうにも、楽しそうだ。

「ああうん。似合つぞ」

似合うかどうかなんて分からないので、適当に返事をしておく。

「そうですかにゃ！」

とろけんばかりの顔である。というかだ、この世界の住人ではない俺とトビの服を買いにきたのであって、ミーニャの服を買いにきたわけではないんだが。

「キキ！ これ、可愛いぞ！」

今度はリーリーがやつてめた。

「そりだな、可愛い可愛い」

「やうかつ、キキもやう思つかー」

「キキ」

またかよ。畠つまでもなく、アビである。

「見てくれ、このマネキン」

「マネキンかよーーー」

しまつた、あまりの流れブレイクから口に出して笑つ込んでしまつた。

「マネキンなんか持つてくるな、戻して来い」

「なんでだよ、オレ、これ買つん」

何に使う気だあほう。そもそも売り物じゃないだろうが。

「アビさん、マネキンを買つてどうするのですかにゅー？」

訊くなよ。どうせくだらないにきまつてこるんだから。

「使う。じつ、この辺に穴を開け

「言わせねえよつ、お前は頭がおかしい、いいから今すぐ戻して來いーーー」

「ええー……お前にも使わせてやるからよ、畠つてくれよ」「誰が使つかあほつ。

「聞こえなかつたようだな、戻して來い」

「分かつたわかつた、諦めりやいんだり」

渋々（しぶしぶ）と戻していったアビ。服屋に来て何を考えているんだ、あいつは。変態つてこいつが、もう、どうひきもなこやつだ。

「アビさん……すくへえつけですにゅーーー」

爆発するんじやないかと思うほど、真っ赤な顔でうつむくへーーー^{ヤ。どうやらそっち方面には耐性がないらしい。}

コーリーはとこうと、不思議そうに小首を傾げていた。お子ちゃんにわかるまつて。

「なあ、キキ」

「さてと、本腰入れて服を選ぶかな。リーリー、悪いが訊きたいことがあるのな」ミーニャに訊いてくれ

「う、うむ

「あ、ずるいですにゃあ

「何がズルいのだ？」

四苦八苦しているミーニャを置き去りにしてその場を立ち去る。子供に性的質問をされても上手く答える自信がないので、後はミーニャにお任せだ。押し付けたともいうが。

言った手前、一三着は服を見繕つておくことにする。数字は読めないので、このさい値段は無視して機能性だけを重視する。

「とはいってもな、どういった素材が動きやすいだとわからんなあ

服に詳くわしくない俺が、どういった素材のものが動きやすいかなど知っている訳もない。それも、異世界となればなおさらだ。

「キキ様……？」

「ん？ あんたは、確かきのうの」

「ルイサでござこます」

そうだそうだ。きのうの祭りで仲良くなつた女の子で、話していたところをトビに追突されて机にダイブした子だ。

「奇遇だな、あんたも服を買いに来たのか？」

「はい。オルタ様が領主に戻られたので、その記念にと記念にして

そう言つてにっこりと笑つた。

こう、なんだ、彼女は好みのタイプだつたりする。腰くらいまである茶色がかつた綺麗な髪、澄んだ蒼い瞳、美少女ではないものの、癖のない整つた顔。何より、物腰が柔らかくて知性的なのがとても良い。総じて、可愛いと思つ。

「そのように見つめられでは、照れてしまします……」

「あつと、悪い。ああそりだ、いま、動きやすそうな服を選んでいるんだが、良かつたら手伝ってくれないか？」

照れ隠しも含め、そんなことを頼んでみる。

「私でよろしいのですか？　男の人の服など選んだことがないのですが……」

控えめで実によろしい。ビーナのあほつや天然ぶりっ子の猫耳娘、

お子ちやま妖精とは違うな。

「そんな難しく考えなくてもいいんだ。嫌なら別に断つてくれてもいい」

「あ、嫌なんかじゃありません。その、頑張りますので、お手伝いさせてほしいです」

「気遣いもできるなんて、本当にいい子だ。たまらん。

「悪いな、じゃあ頼むよ」

「はい」

色々なことを話しながらルイサと服を見て回る。女の子と一緒に服を見て回ることは初めての経験であり、とても新鮮で楽しく感じる。トビのように常に軌道を逸した行動もしないので、とにかく穏やかな気持ちでいられるのが嬉しい限りだ。

「このコートはどうでしょ？　つか、丈夫で柔らかく、なおかつ汚れにくい材質でできていますよ」

ルイサの選んだコートを手に取って見てみる。

フードの付いた黒のコートだ。オール黒というわけではなく、襟えり元と袖元には赤色のジグザグ模様が入っている。背には同じく赤で、ツノ？　みたいな絵が横向きで一本描かれていた。長さは膝くらいまでだ。

「コートというのは悪くない判断だと思う。こちいち洗う必要はないし、なんにでも合わせることができ。なにより、黒は俺の好きな色だ、うん、悪くない。

「着てみてはどうですか？」

「そうだな」

その場にておとと羽織る。肌触り、サイズと申し分ない。

「いい感じだ。うん。悪くない。ルイサはどう思つ？？」

「はい、とてもお似合いだと思います！」

「そ、そ、うか。な、ら、こ、れをか

「アーニー、アーニー、アーニー！」

にきなりながら、この事は、

何を考えているのか、唐突にミーニャが現れて威嚇をしてきた。クソ猫が、ふざけやがって、少しひっくりしただろうが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9375x/>

キキとあほうとにや

2011年11月27日16時57分発行